トランスフォーマーエレメントフォース

烈火竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トランスフォーマーエレメントフォース

【Ｎコード】
Ｎ０１３０Ｏ

【作者名】
烈火竜

【あらすじ】
トランスフォーマーの故郷『セイバートロン星』に地球人の子供と謎のトランスフォーマーが現れる。
それは戦いの始まりだった。

祭壇［めざめのとき］（前書き）

トランスフォーマーが好きな方に満足出来れば嬉しいです。

祭壇［めざめのとき］

とある祭壇。

どこもかしこも近未来的な作りだった。

祭壇の上に大型のロボット、トランスフォーマーが大きな手で祈っていた。

すると、一台のレーシングカーが走って来る。

そのレーシングカーの外装は不死鳥をイメージされていた。

「トランスフォーム！」

女性の声で発声し、ロボットに変形した。

女性のトランスフォーマーである。

「兄上、およびですか？」

祭壇で祈るトランスフォーマーを『兄上』と呼ぶ。

「よく来た、ベクターフェニックス」

女性のトランスフォーマーを『ベクターフェニックス』と呼ぶ。

「・・・・・・遂に時が来た」

ベクターフェニックス
「『エレメントジュエリー』が目覚めたのですか？」

「そうだ、お前はすぐに『セイバートロン星』に行き、彼らの、［サイバトロン］の協力を得るのだ」

ベクターフェニックス
「わかりました！」

「くれぐれも［デストロン］に知られるな」

ベクターフェニックス
「わかっています、ベクターカオス兄上！」

ベクターフェニックスはレーシングカーに変形して、走り去る。

『ベクターカオス』と呼ばれたトランスフォーマーは祭壇の上を見上げる。

ベクターカオス
「偉大なる神よ、どうか宇宙を脅かす悪の根源を消して下さい」

ベクターカオスは祈るのだった。

今、トランスフォーマーの戦いが始まろうとしていた。

祭壇［めざめのとき］（後書き）

指摘があれば教えて下さい。

宝石［よちょう］（前書き）

次はあのトランスフォーマーの二人と人間の登場です。

宝石［よちょう］

とても暗い空間

一人の少年がそんな空間に漂っていた。

「・・・・・・ここはどこだろ？」

少年は不思議に思う。

すると、その先で激しく輝くものに気づく。

二体のロボットが、トランスフォーマーが戦っていた。

一方が赤く、もう一方は灰色だった。

「ハァァァァァァァァァァァァ！！」

「ヌオォォォォォォォォォォォォォォォ！！」

トランスフォーマー同士のぶつかり合いに少年は驚く。

「な、なんだ！？」

「いい加減に諦めろ、ドラゴンコンボイ！」

赤いトランスフォーマーを『ドラゴンコンボイ』と呼ぶ。

ドラゴンコンボイ

「そっちこそ諦めな、バーストメガトロン！」

灰色のトランスフォーマーは『バーストメガトロン』と呼ぶ。

「・・・・・ドラゴンコンボイ？・・・・・バーストメガトロン？」

ドラゴンコンボイとバーストメガトロンは拳と拳を、蹴りと蹴りをぶつけ合う。

先ほどの輝きは二人のぶつかり合いの輝きだった。

「何で喧嘩をしているんだ？」

少年は怯える。

すると、別の方向からいくつもの色の輝きが見える。

少年が真っ先に気づく。

「な、何？」

いくつもの色の輝きが少年を通り抜ける。

その通り抜けた瞬間、少年は心の奥から何かを感じ取る。

「な、なんだ、今の感じは！？」

少年は振り向くと、いろんな色の輝きが向かって行った先は、

地球だった。

「地球！？なんで地球なの！？」

少年は驚き、気づいた。

ここは宇宙空間だと。

ドラゴンコンボイとバーストメガトロンもいろんな色の輝きに気づく。

ドラゴンコンボイ

「なんだあれは？」

バーストメガトロン

「・・・・・・わからん」

二人は呆気に取られる。

「・・・・・・一体何なんだ？」

少年は混乱するのだった。

そして・・・・・・

ジリリリリリリリリリリリ

「ハッ！」

少年は起き上がった。

起き上がった場所はベッドの上だった。

「・・・・・・夢か・・・・・・」

少年はホッとする。

しかし、少年は後から感じていた。

夢にしては実に現実に感じたと。

【リビング】

少年は厳しそうな父親と厳格そうな祖父と一緒に朝食をとる。

少年は食パンを口に運ぼうとすると、

「優也」

父親は少年を『優也』と呼ぶ。

少年の名は『優也』である。

「昨日先生からの連絡で、体育でのチームの連携が上手くいっていないようだな」

優也は黙る。

「みんなの足を引っ張るのは感心できんな」

優也

「・・・・・・みんなはとても上手いんだ。なかなかついてこれなくて・・・・・・」

「チームになった以上は邪魔にならないようにしろ。ついてこれなくてもそれぐらいの気遣いをしろ」

「賢人君」

祖父は父親のことを『賢人』と呼ぶ。

父親は『賢人』である。

「・・・・・・朝食位はそういう会話はしなくても良い」

賢人

「いいえお義父さん、言っておかなければなりません。そうしなければ同じことを繰り返してしまいます」

「・・・・・・うむ」

賢人

「付き合いも上手くできないとは・・・・・・。これから先が思いやられる」

優也

「・・・・・・ごめんなさい」

賢人

「謝る暇があるなら努力しろ」

賢人は食事を続ける。

「旦那様」

年老いた手伝いが受話器を持って現れる。

「会社から連絡が来ています」

賢人

「わかった」

賢人は受話器を受け取る。

賢人

「なんだ？」

優也は落ち込む。

祖父は優也のことを心配する。

【通学路】

優也はとぼとぼと歩く。

優也は悩んでいた。

不思議な夢よりも父に言われたことを気にしていた。

優也

「・・・・・・みんなに合わせる。・・・・・・難しいんだよな」

実はこの優也の家はとてもお金持ち。

父の賢人は有名な会社の社長である。

そしてその息子の優也は名門小学校に通う小学４年生。

・・・・・・しかし、運動があまり得意ではない。

しかも学業も成績良くもなかった。

他のクラスメイトより劣っていた。

だからいじめられていた。

優也は周りについていけなかったのだ。

優也

「・・・・・・邪魔にならないようにか・・・・・・もう邪魔もの扱いなんだけどな」

その時、

ドン！

優也
「わっ！？」
「おっはよ！」

優也の背中を強く叩く黒髪のショートヘアーの少女がいた。

優也
「か、火鈴、脅かさないでよ・・・」

優也は少女を『火鈴』と呼んだ。

火鈴
「活を入れただけよ！」

この火鈴は優也の幼なじみである。

ただし、別の小学校に通っている。

通学路が途中まで一緒なので、一緒に通っている。

火鈴
「・・・・・また親父になんか言われたか？」

優也
「べ、別に・・・」

火鈴
「・・・・・・そう・・・・・・・。それより、私の誕生日は来れるか？」

優也
「えっ？」

火鈴
「忘れてないだろうな？」

ギュウウウウウウ～

優也
「痛い痛い痛い～」

火鈴は優也の頬をつねる。

優也
「忘れてない、忘れてない！・・・・・・けど、今度の休みは家庭教師が来るんだ」

火鈴
「・・・・・・そうか」

優也
「・・・・・・ごめん」

すると、火鈴は拳を優也の顔につき出す。

火鈴
「来れない分、プレゼントは倍だからな」
優也
「う、うん・・・・・・」
優也は苦笑する。
歩きながら話していると、別れ道に着く。
火鈴
「じゃあな」

優也
「うん」
火鈴は自分の小学校に行く。
優也は火鈴のプレゼントで悩む。
優也
「・・・・・・何がいいかな」
空を眺めてみると、
ビューーーーン！

空の向こうから光が向かってくる。

優也
「えっ？」

ゴチン！

優也の額に当たる。

優也
「痛い痛い痛い～」

二度目の痛い目に合う優也。

額に当たったものは、綺麗な宝石だった。

優也は拾う。

優也
「・・・・・・宝石？」

額を擦りながら眺める。

その宝石は手のひらサイズの『ダイヤモンド』だった。

優也
「よ、よく額が割れなかったな・・・・・・」

優也は恐ろしく思う。

しかし、優也はまだ知らない。

このダイヤモンドがもっと恐ろしいことを引き起こすことを。

次回に続く。

宝石［よちょう］（後書き）

いかがでしたか？

感想待っています。

遭遇［であい］（前書き）

ドラゴンコンボイ

「よう、俺はドラゴンコンボイだ！これを読んだら２４時間内に感想を書くんだ、急げよ！俺も準備する！（〇ャック・バウアー風）」

とにかく始まります。

遭遇［であい］

【通学路】

夕焼けの空の下、優也は帰宅途中で、今朝拾ったダイヤモンドを掲げながら見つめていた。

ダイヤモンドは夕焼けに輝いていた。

優也
「綺麗だな・・・・・・」

優也は良いことを思いつく。

優也
「そうだ、このダイヤモンドを火鈴のプレゼントにしよう。きっと喜ぶぞ」

優也はダイヤモンドをプレゼントにすることを決める。

優也
「今日は不思議なことが多いな」

優也は夢のことと今回のダイヤモンドを考える。

そして、あることに気づく。

このダイヤモンドは、夢に出てきた色んな光の一つではないかと。

優也
「・・・・・・まさかね・・・・・・・」
優也は偶然だと思いたいが、偶然とは思えなかった。
優也
「さて、帰る・・・・・・」
すると、ダイヤモンドが輝き出す。
優也
「えっ？」
輝きが一気に増す。
優也
「わっ！？」
優也は反射的に目を閉じる。
光は辺りを包んだ。
優也

「・・・・・・う、うーん」

優也はゆっくり目を開ける。

優也

「・・・・・・・えっ・・・・・・・」

優也は言葉を失う。

何故なら、目を開けると全く違う場所にいたからだ。

その場所はアスファルトではない金属の地。

夕焼けから星空になっていた。

見渡しても、ビル一つがない平らな地。

明らかに通学路とは違う場所だった。

優也

「此処はどこなの！？」

優也は大声をあげる。

優也

「いったいどうなっているんだ？」

優也は混乱する。

優也
「どうなっているんだ？突然ダイヤモンドが光ったと思ったら、全く違う場所にいるんだ？」

優也は頭を抱えて悩む。

優也は空を見上げると、一機の戦闘機が飛んでいた。

優也
「戦闘機だ！おーい！」

優也は助けてもらおうと大声をあげたり、手を降ったりする。

優也に気づいたのか、戦闘機が近づいてくる。

優也
「良かった、気づいてくれた」

優也は安心する。

すると戦闘機が、

「トランスフォーム」

優也
「えっ？」

人型に変形した。

トランスフォーマーだった。

トランスフォーマーは優也の目の前に着地する。

優也は驚愕する。

体の色が青く、顔の左側には大きな傷あとがあった。

トランスフォーマーは右目で優也を見つめる。

「なんだこりゃ？」

優也は震えながら、

優也

「しゃ、喋った！」

「喋っちゃいけないか？」

優也

「い、いいえ！」

「お前も喋るんだ。・・・・・・何者か答えるか？」

ライフルを突きつけて尋ねる。

優也
「ゆ、優也です！荒神優也です！」

「・・・・・・変わった名前だな。どこから来た？つーか、なんなんだ？」

優也
「な、なんなんだって言われても・・・・・・」

「・・・・・・トランスフォーマーではないことは確かだな」

優也
「トランスフォーマー？」

「俺らロボット生命体のことを『トランスフォーマー』と呼ぶんだ。それで、お前は？」

優也
「・・・・・・に、人間です」

「・・・・・・人間？」

トランスフォーマーは首を傾げる。

優也はトランスフォーマーを見て、あることを気づく。

優也

「・・・・・・あのう、いくつか聞いていいですか？」

「なんだ？」

優也

「此処は何処ですか？」

「セイバートロン星だ」

優也

「セイバートロン星？」

「俺らトランスフォーマーの星さ。今は政権の取り合いで戦争中さ」

優也

「せ、戦争・・・・・・誰と誰が争っているの？」

「我が『デストロン』と『サイバトロン』だ」

優也

「デストロンとサイバトロン？」

「俺はデストロン軍の航空隊長を務める『ダージ』だ」

優也

「・・・・・・ダージ」

ダージ

「さて、次は俺の番だ。人間の優也はどうして此処にいるんだ？」

優也
「・・・・・・わからないんだ。この宝石を見ていたら、突然光出したんだ！光がおさまったら、此処に居たんだ！」
優也はダイヤモンドを見せる。
ダージはダイヤモンドを見ると同時にスキャンする。
ダージ
「なんだ、不思議にエネルギーを感じるな」
優也
「エネルギー？」
ダージ
「こりゃ、お前ごと本部に持って行くか」
ダージは優也を掴む。
優也
「ええっ！？」
ダージ
「お前のことは『バーストメガトロン』様に決めて貰うぞ」
優也
「バーストメガトロン！？」
ダージ
「なんだ、バーストメガトロン様を知っているのか？」

優也
「うん『ドラゴンコンボイ』っていうロボットと喧嘩していたロボットでしょう？」

ダージ
「ドラゴンコンボイも知っているのか？」

優也
「バーストメガトロンって？ドラゴンコンボイって何？」

ダージ
「バーストメガトロン様は我がデストロン軍の破壊大帝。そしてドラゴンコンボイはサイバトロンの総司令官だ」

優也
「そうなんだ？」

ダージ
「なんで二人を知っているんだ？」

ダージは睨む。

優也
「ゆ、夢で見たんだ」

ダージ
「・・・・・・夢？」

ダージは首を傾げる。

ダージ
「・・・・・・まあいい。ゆっくり本部に・・・・・・・」

ダージが連れて行こうとしたその時、

ブゥゥゥゥゥゥゥゥゥン！

優也／ダージ
「えっ？」

「ハアッ！」

ドカァァァァァァン！

ダージ
「ぐわっ！」

走ってくる何かがダージの背中にぶつかる。

その反動でダージは優也を離してしまう。

優也
「うわっ！」

優也は吹き飛ぶ。

「危ない！」

高速に飛び出し、優也を大きな手で受け止めた。

優也は驚いた。

自分を受け止めたのは、

優也

「・・・・・・ドラゴンコンボイ」

そう、ドラゴンコンボイだった。

ドラゴンコンボイ

「あれ、君は俺のことを知っているのか？」

そして、ダージにぶつかったのは、

「トランスフォーム！」

ベクターフェニックスだった。

ダージ
「あっ、いってて～」

ドラゴンコンボイ
「悪いな、ダージ」

ドラゴンコンボイはダージの方を振り向く。

ダージ
「ド、ドラゴンコンボイ・・・・・・」

ベクターフェニックス
「この子と『エレメントジュエリー』は貴様たちには渡さん！」

優也
「エレメントジュエリー？」

優也はダイヤモンドを見つめる。

このダイヤモンドこそが『エレメントジュエリー』である。

次回に続く。

遭遇［であい］（後書き）

遂にドラゴンコンボイと出会った優也！

次はアイツの登場だ！

役目〔えらばれる〕（前書き）

私はベクターフェニックスだ。

私は巫女を務めている。

巫女だから重大な役目を背負っているので、応援してくれ。

それでは『トランスフォーマーエレメントフォース』始まるぞ。

トランスフォーム！

〔ベクターフェニックス〕

役目〔えらばれる〕

ドラゴンコンボイとダージは対峙した。

互いに緊張感が走る。

ドラゴンコンボイに抱えられた優也はハラハラする。

ダージ
「・・・・・・ドラゴンコンボイと見慣れない奴で二人か。・・・・・・分が悪いな」

ドラゴンコンボイ
「悪いが、二人じゃないんだよ」

ダージ
「えっ・・・・」

ブブーッ！

「俺達もいるぜ！」

ダージの後ろから白黒の車と紅い戦闘機が一台ずつやって来た。

ダージ

「・・・・・・チッ、トランスフォーム！」

ダージは戦闘機にトランスフォームし、この場を離れようとした。

「逃がすか！」

紅い戦闘機がダージを追いかけようとするが、

ドラゴンコンボイ
「ルビーウィング、追わなくていい！」

紅い戦闘機を『ルビーウィング』と呼んで止めた。

そして、ダージの飛び去った。

ルビーウィング
「何故です？」

ドラゴンコンボイ
「彼（優也）を保護したんだ、それで良い」

ルビーウィング
「・・・・・・わかりました」

ルビーウィングは引き返し、

ルビーウィング

「トランスフォーム！」

と変形して着地する。

ルビーウィングは女性トランスフォーマーである。

ドラゴンコンボイはしゃがみ、抱えた優也を地に降ろし、そのまま
の体勢で話を始める。

しゃがんでもドラゴンコンボイは大きかったので、優也は見上げる。

ドラゴンコンボイ

「・・・・・・さてと、君の名前は？」

優也

「あ、荒神優也です」

ドラゴンコンボイ

「・・・・・・荒神優也か」

優也

「優也で良いです」

ドラゴンコンボイ

「優也か」

ドラゴンコンボイは立ち上がり、

ドラゴンコンボイ
「ようこそ、セイバートロン星へ。それじゃ、トランスフォーム！」

ドラゴンコンボイは大型戦闘機に変形する。

優也は驚く。

ドラゴンコンボイ
「さっ、乗った乗った」

ドラゴンコンボイは扉を開けて、優也を乗せようとする。

優也はドラゴンコンボイを見て感じた。

『とても良い人だ』と。

【サイバトロン基地のゲート前】

此処はサイバトロン軍の本拠地エリア。

たくさんのサイバトロン達が此処で日夜訓練や監視をしている。

そしてこの巨大な扉が『ゲート』と呼ばれる入り口である。

ドラゴンコンボイ達は帰ってくる。

ドラゴンコンボイから降りた優也はゲートの大きさに驚く。

ドラゴンコンボイ
「そんなに緊張しなくても大丈夫だ」

ドラゴンコンボイは自分の紋章〔サイバトロンマーク〕をゲートにある紋章にかざすと、ゲートが横開きする。

ドラゴンコンボイ
「どうぞ」

優也
「う、うん」

【サイバトロン基地内】

優也
「うわ～」

優也は基地内を見て驚いた。

数多くのトランスフォーマー達が忙しく手作業をしたり、格闘訓練

をしていたのだ。

優也
「凄い、まるでロボットの世界に入ったみたいだ」

ドラゴンコンボイ
「みたいじゃなくて、此処は本当にロボットの、トランスフォーマーの世界だ」

優也
「あっ、そっか」

ドラゴンコンボイ
「フフッ」

ドラゴンコンボイは優也から不安がなくなったのを感じてほっとする。

【ドラゴンコンボイの司令室】

ドラゴンコンボイは椅子に座り、優也は机の上に立つ。

ルビーウィングなどのトランスフォーマー達が見守るように控えていた。

ドラゴンコンボイ

「さて、優也。いくつか質問するが、その前に自己紹介をしよう」

優也
「は、はい」

ドラゴンコンボイ
「まずはさっきダージを追おうとしたルビーウィングから」

ルビーウィング
「はい。航空士官ルビーウィングです、よろしくね」

優也
「よろしく」

ドラゴンコンボイ
「次にルビーウィングと一緒に来た、『ギアボルト』」

ギアボルト
「はい！俺は射撃手ギアボルトだ、よろしくな！」

優也
「よろしく」

ドラゴンコンボイ
「次にダージから君を救ってくれたのが」

ベクターフェニックス
「ベクターフェニックスだ。私はサイバトロンではなく、巫女だ」

優也

「巫女？」

ドラゴンコンボイ
「あとから説明しよう。そして俺が司令官のドラゴンコンボイだ！」

優也
「司令官って、偉いんだ！」

ドラゴンコンボイ
「はっはっはっ、凄いだろ？」

優也
「うん！」

ドラゴンコンボイ
「はっはっはっ、正直な子だ」

ドラゴンコンボイは照れる。

ベクターフェニックス
「おっほん！ドラゴンコンボイ殿、そろそろ良いかな？」

ベクターフェニックスは調子に乗っているドラゴンコンボイを見かねて横槍を入れる。

ドラゴンコンボイ
「おっと、失礼。どうぞ」

ベクターフェニックスはドラゴンコンボイと席を代わってもらう。

ベクターフェニックス
「さて、どうして君が此処(セイバートロン)に来てしまったのか、わかるか？」

優也
「い、いいえ。こっちが知りたいです」

ベクターフェニックス
「それは君の持っている『シャイニングダイヤモンド』が君を此処へ導いたのだ」

優也
「こ、これのこと？」

優也はダイヤモンドを見せる。

ベクターフェニックス
「そうだ、それは『エレメントジュエリー』の一つ〔シャイニングダイヤモンド〕だ」

優也
「エレメントジュエリー？」

ベクターフェニックス
「エレメントジュエリーとは神が宇宙を生み出した時に使った神秘の宝石だ。一つ一つに要素、自然の力が秘められている」

優也
「神様が使った宝石！？」

優也はシャイニングダイヤモンドを見つめて、内心驚いていた。

優也
「・・・・・・じゃあ、このシャイニングダイヤモンドはどんな力が秘められているの？」

ベクターフェニックス
「光の力だ。しかも自らの意思を持っている。優也を此処に連れてきたのもその証拠だ」

優也
「・・・・・・なんで僕をセイバートロン星に連れてきたの？」

ベクターフェニックス
「・・・・・・・・・それは優也が選ばれたからだ」

優也
「えっ・・・・」

すると、ベクターフェニックスの胸の紋章が輝き、あるものが出てきて優也の手にわたる。

それは人間の大きさに合わせた金色の腕輪だった。

幾つか宝石を散らば巻かれていた。

優也
「これは？」

ベクターフェニックス
「それはエレメントジュエリーを納め、力を発動させる聖なる腕輪だ」

優也
「ふーん、大きさがぴったりだ」

ベクターフェニックス
「元々それを使っていたのは君と同じ人だ」

優也
「そうなんだ」

ベクターフェニックス
「君は地球に戻り、散らばったエレメントジュエリーを集めなければならない」

優也
「えっ、地球に!?」

ベクターフェニックス
「そうなのだ。地球とは神が太陽の次に創られた星であり、要素や自然に溢れているからな」

優也は地球で思い出す。

優也
「そうだ、僕の夢でいくつもの光が地球に行っちゃった!・・・・・・・あれはエレメントジュエリーだったのか・・・・・・。ちょっと

待て！僕が地球に散らばったエレメントジュエリーを集めるの！？」

ベクターフェニックス
「その通りだ」

優也
「・・・・・・そんなの無理だよ」

優也は腕輪を見ながら、大役に選ばれたことで不安になる。

ドラゴンコンボイは心配する。

ベクターフェニックス
「・・・・・・シャイニングダイヤモンドが・・・・・・エレメントジュエリー達の意思が選んだ事だ」

優也
「・・・・・・でも」

ベクターフェニックス
「選ばれた以上、役目を果たさなければならない。腕輪を使い、サイバトロン達と協力しながらエレメントジュエリーを集めるのが君の役目だ」

優也
「あっ、そうなんだ・・・・・・・・って、それでも凄く大変じゃないか！！」

優也の大声は司令室まで響いた。

ドラゴンコンボイ達はびっくりした。

天井の穴から覗いていた怪しい影もびっくりした。

【？？？】

とても薄暗い広間。

そんな広間は司令室でのベクターフェニックスと優也の会話が響いていた。

玉座に座る灰色のトランスフォーマー、バーストメガトロンが二人の会話を聞き、ニヤリと笑う。

そばには赤と黒を基調したトランスフォーマーが立っていた。

そして、バーストメガトロンの前にダージが控えていた。

おまけに隣に緑色で、猪のような顔付きのトランスフォーマーもいる。

バーストメガトロン
「神が使った宝石エレメントジュエリーか・・・・・・」
「そして、それを集めるのが、優也という少年ですね」
ダージ
「すみません、連れてくれば・・・・・・」
「元気出せよ、また捕まえれば良いじゃんか」
バシバシとダージの背中を叩いて、励ます。
「簡単に言うな、ベヒータス」

緑色のトランスフォーマーは『ベヒータス』と呼ばれる。

ベヒータス
「だって、失敗したら学んで、次で取り戻せって言ってたじゃん、スタースクリーム」
赤と黒を基調したトランスフォーマーは『スタースクリーム』と呼ばれる。

バーストメガトロン
「ベヒータスの言う通りだ」

バーストメガトロンは立ち上がる。

バーストメガトロン
「『コラーダ』の知らせがきたら、すぐに優也というガキとエレメントジュエリーを頂くのだ！」

今、デストロンが動き出した。

次回に続く

役目〔えらばれる〕（後書き）

重大な役目を背負うことになった優也の運命は！？

デストロンも動き出した。

襲撃〔あらそい〕（前書き）

いやー、諸君。オーキド・・・じゃなく破壊大帝バーストメガトロンだ。

宇宙は全て、デストロンが支配するのがふさわしい。

その為にはエレメントジュエリーを我が物に・・・・・。

デストロン軍よ、ポケモン・・・じゃなくエレメントジュエリーゲットじゃぞ！

〔バーストメガトロン〕

襲撃〔あらそい〕

【デストロン基地】

ドーン、ドーン、ドーン、ドーン

バーストメガトロンは歩く。

スタースクリームは付き従う。

バーストメガトロンがたどり着いたところは高い祭壇だった。

その下にはたくさんのデストロン軍のトランスフォーマーがいた。

中にはダージとベヒータスもいた。

バーストメガトロン

「聞けぇ、デストロンの同志達よ！遂にサイバトロンを、セイバートロン星を手に入れることができる素晴らしい手段がある。それは・・・・・奇跡の宝石『エレメントジュエリー』を手に入れることだ！」

デストロン達は驚く。

バーストメガトロン
「エレメントジュエリーとは神が使ったと言われている宝石だ。素晴らしい力が秘められているらしい。その宝石のいくつかが『地球』という星にあるらしい」

スタースクリーム
「それがあれば、我々の目的である『宇宙征服』が叶うのだ」

デストロン達はさらに驚く。

バーストメガトロン
「それにはまず、『荒神優也』という地球人のガキを捕まえるのだ。サイバトロン供はこれから地球に行くつもりだ。だが、お前達はすぐにサイバトロン基地を襲い、サイバトロン供の動きを止めろ」

スタースクリーム
「その隙にバーストメガトロン様がガキを捕まえて、地球に行きエレメントジュエリーを集めるのだ」

デストロン達は納得する。

バーストメガトロン
「これはデストロンの最大の作戦だ。・・・・・・お前たち覚悟はあるか？」

「「「ありません！」」」

バーストメガトロン

「よくぞ言った。では、デストロン軍出撃だ！」

「「「オーッ！オーッ！オーッ！」」」

デストロン達は歓声をあげるのだった。

ベヒータス
「サイバトロン基地を出撃か・・・・・・暴れような」

ダージ
「ああっ、その時は必ず奴も倒す」

ベヒータス
「奴？・・・・・・あっ、あの裏切り者か！」

ダージ
「・・・・・・ああっ、あの裏切り者だ」

ダージは強く握りこぶしを作った。

とても強い憎悪を漂わせていた。

ベヒータス
「ヒィィ！」

ベヒータスは怯える。

そんなダージをスタースクリームは心配そうに見守っていた。

【サイバトロン基地：ワープゲート前】

サイバトロン達は巨大なワープゲートの点検をしていた。

ワープゲートとは円に沿って建てられた特殊な柱達の中心に『瞬間移動の入り口』を作り出す。

これで地球に行くのだ。

優也は近未来型のパトカーに変形したギアボルトに乗って、サイバトロン達の作業を見ていた。

優也の表情はとても暗かった。

ギアボルト
「優也どうした？地球に帰れるんだぞ。しかも優也の家にワープするんだぞ」

優也
「うん、嬉しいんよ。・・・・・・でも、帰った後がとても大変だよ」

ギアボルト
「エレメントジュエリーを集めることがか？凄く大事な役目に選ばれたんだ、誇りに持てよ」

優也
「だから不安なんだよ！地球に散らばっているエレメントジュエリーを集めるんだよ！地球はとても広いんだ」

ギアボルト
「心配するな。俺やドラゴンコンボイ司令官達が協力してくれるんだ。優也に負担はかけないって」

優也
「あ、ありがとう・・・・・・」

ギアボルトの励ましでも、優也の不安が取り除けなかった。
すると、空から飛んでくる羽根を生やした白馬、ペガサスがやってくる。

「トランスフォーム」

ペガサスは変形する。

ギアボルト
「あ、『セイバーペガサス』」

ギアボルトはペガサスを『セイバーペガサス』と呼ぶ。

優也

「セイバーペガサス？」

ギアボルト
「サイバトロン軍の作戦参謀さ」

セイバーペガサスはギアボルトに近づく。

セイバーペガサス
「ギアボルト、地球人の少年を紹介してくれないか？」

ギアボルト
「いいぜ。ほら優也」

ギアボルトは扉を開ける。

優也はギアボルトから出る。

セイバーペガサス
「初めまして、セイバーペガサスだ、よろしく優也君」

優也
「は、初めまして、荒神優也です」

セイバーペガサス
「地球人というのは我々と違うんだな」

優也
「は、はい。みんなのように大きくないし、変形出来ません」

ギアボルト
「そうなんだ！」

セイバーペガサス
「・・・・・・我々の存在は決して明かさないのがルールなんだ」

優也
「何でですか？」

セイバーペガサス
「地球人に我々の戦いに巻き込まない為だ。そうなれば敵と見なされる」

優也
「・・・・・・そうですね」

セイバーペガサス
「地球に戻っても我々のことは勿論、エレメントジュエリーのことも話さないでくれ」

優也
「わかりました」

セイバーペガサス
「私も地球に行く予定だ。よろしく頼むよ」

優也
「はい」

再びセイバーペガサスは変形して、空に飛んでいく。

見送った後も優也の表情は浮かなかった。

すると、ギアボルトを通して、優也を見つめる、一点の緑色の光があった。

優也
「わっ！」

ギアボルト
「おっ、レーザーウェーブ！」

優也
「レ、レーザーウェーブ？」

緑色の一点の光は『レーザーウェーブ』というトランスフォーマーの目である。

更に右腕は砲台ようであった。

ギアボルト
「こいつはサイバトロン軍技術開発局長官のレーザーウェーブだ」

優也
「よ、よろしく」

レーザーウェーブ
「！？」
レーザーウェーブは激しく動揺し、しゃがみこむ。
優也は驚く。

ギアボルト
「・・・・・・レーザーウェーブはその怖がりなんだ。優也みたいなものは初めてなんだ」
優也
「・・・・・・そ、そうなんだ」

優也はレーザーウェーブの方が怖いなと思うのだった。

【サイバトロン基地：深部】

ドラゴンコンボイとベクターフェニックスがいた。

そして、謎の光と対面していた。

ドラゴンコンボイ
「ドラゴンコンボイ、ベクターフェニックスと一緒に来ました、『ベクターシグマ』」

光のことを『ベクターシグマ』と呼んだ。

ベクターシグマとは、セイバートロン星のマザーコンピューターである。

ベクターシグマ
『よく来ましたね、ドラゴンコンボイ、ベクターフェニックス』

ベクターフェニックス
「はい、この度のご協力感謝します、ベクターシグマ」

ベクターシグマ
「いいえ、宇宙の命運がかかっているんです。サイバトロンも私も全面的にご協力します」

ベクターフェニックス
「ありがとうございます」

ベクターシグマ
「そういえば、此処〔セイバートロン星〕に地球人の子供は・・・・・・」

ドラゴンコンボイ
「・・・・・外にいます」

ベクターフェニックス
「なぜ連れてこなかったのだ？ベクターシグマに会わせる義務があるだろう」

ドラゴンコンボイ
「それは・・・・・・」

ベクターシグマ
「考えがあってのことですよね」

ドラゴンコンボイは頷く。

ドラゴンコンボイ
「地球人は・・・・・・荒神優也はとても強いプレッシャーに押されています」

ベクターフェニックス
「強いプレッシャー？」

ドラゴンコンボイ
「無理もありません。突然セイバートロン星という未知なるところに来てしまい、我々トランスフォーマーというロボット生命体に出会いました。そして、宇宙の命運がかかった『エレメントジュエリー』を集めるという使命を与えられました。プレッシャーになるのも仕方がありません。そんな優也と貴女を会わせると、ますますプレッシャーを与えてしまいます」

ベクターシグマ
「・・・・・・なるほど」

ベクターフェニックス
「しかし、選ばれた以上やるしかない。あなた方サイバトロンはそんな優也を助けるのだろう？」

ドラゴンコンボイ
「もちろん、そのつもりだ。・・・・・・だが、それはつまりデストロンと、トランスフォーマー同士の戦いに巻き込むということでもあろう？・・・・・・俺、個人としても巻き込みたくない」

ベクターフェニックス
「我々は戦う為に地球に行くのではない。エレメントジュエリーを探すのが目的だ」

ドラゴンコンボイ
「それはわかっている。だが・・・・・・」

ベクターシグマ
「ドラゴンコンボイの意見はもっともです」

ベクターフェニックス
「ベクターシグマまで・・・・・・」

ベクターシグマ
「私もあの優也を戦いに巻き込むのはあまり賛成できません。・・・・・・しかし、断ることも後に引くのもできません。エレメントジュエリーがあの子に大きな大役を任せたのは何か理由があってのことでしょう」

ドラゴンコンボイ
「その理由とは？」

ベクターシグマ
「私にもわかりません。ドラゴンコンボイ、デストロンと戦いなが

ら部隊を率いて、エレメントジュエリーの捜索するという多忙な身で申し訳ありませんが、優也が選ばれた理由を探ってくれませんか？」

ドラゴンコンボイ
「・・・・・・わかりました。優也の選ばれた理由を探ってみます」

ベクターシグマ
「いつも申し訳ありません」

ドラゴンコンボイ
「その代わり、ご協力を要請する時は、お願いしますよ」

ベクターフェニックス
「ちょっとドラゴンコンボイ殿！ベクターシグマに協力を求めるなど・・・」

ドラゴンコンボイ
「多い仕事をこなしているんだ。少し位は得を得たって・・・」

ベクターフェニックス
「それがサイバトロン総司令官の言葉ですか？偉大なマザーコンピューターであるベクターシグマの頼みごとは無償で引き受けるのは当然だろう」

ドラゴンコンボイ
「偉大な方なら褒美や報酬を渡してくれるのが当然だろう？」

ベクターフェニックス
「聞いたことは無い！正義の味方が見返りを求めるな！」

ドラゴンコンボイ
「堅いことを言うなよ、ロボットなだけに」

ベクターフェニックス
「うまいことを言うな！」

ベクターシグマ
「構いませんよ、ベクターフェニックス」

ベクターフェニックス
「ベクターシグマ！しかし・・・」

ベクターシグマ
「ドラゴンコンボイは多忙な任務をよくやってくれます。お願いの一つぐらいは聞いてあげて良いと思います」

ベクターフェニックス
「お言葉を返すようですが、正義に見返りを求めるのは正義ではあらずと私は思います」

ベクターシグマ
「そのお心遣い、立派です。流石は巫女を務める者です」
ベクターフェニックスは照れる。

ドラゴンコンボイ
「しかし、もう決まった事だ。とやかくは言わないでくれ」

ベクターフェニックスはドラゴンコンボイを睨む。

ドラゴンコンボイ
「・・・・・怖い顔するなよ、せっかくの可愛い顔が台無しだぞ」

ベクターフェニックス
「なっ！？」

ベクターフェニックスは顔を赤くなる。

ドラゴンコンボイ
「さて、話は代わって、私が率いるのは・・・・・・」

ドラゴンコンボイが言おうとした時、

ドカァァァァァン！

突然爆音が響く。

ベクターフェニックス
「な、なんだ！？」

ドラゴンコンボイ
「・・・・・・まさか」

【サイバトロン基地：ワープゲート前】

地平線の向こうからデストロン軍が砲撃をしながら進軍してくる。

サイバトロン軍は混乱する。

ギアボルト
「優也、しっかり捕まっていろ」

優也
「う、うん！」

ギアボルトは砲撃から逃れながら、サイバトロン軍基地の扉に向かう。

セイバーペガサス
「慌てるな！すぐに体勢を立て直して、攻撃体勢に入るんだ！作業班は引き続き、ワープゲートの最終調整をするんだ」

サイバトロン兵士
「ええっ、正気ですか！？」

セイバーペガサス
「我々はドラゴンコンボイ司令官や優也達を地球に送り届けなければならない。ここで断念すれば無念だろう？」

サイバトロン兵士
「・・・・・・わかりました。すぐに伝達します！」

セイバーペガサス
「頼む」

サイバトロン兵士が伝達した後、セイバーペガサスは通信回線を開く。

セイバーペガサス
「ギアボルト、聞こえるか？」

＊

ギアボルト
「どうした？」

セイバーペガサス
「逃げるんではなく、隠れるんだ。ワープゲートの最終調整を終えたすぐに地球にワープするんだ！」

優也
「ええっ！？」

ギアボルト
「すぐにか！？」

セイバーペガサス
「ワープゲートが破壊されたら、君達はいつまで経っても地球に行けない。サイバトロン軍が守っている間に」

優也
「そんな急に・・・・・・・」

ギアボルト
「・・・・・・・わかった」

優也
「ギアボルトまで！」

ギアボルト
「早く家へ帰らなきゃならないだろう？なら、迷っている暇は無いだろ」

優也
「で、でも、こんなに攻撃が激しいとワープゲートには」

「大丈夫だ」

優也は聞き覚えある声を聞き、上を見上げる。

それはドラゴンコンボイだった。

後からベクターフェニックスとルビーウィングがやって来る。

ドラゴンコンボイ
「我々が援護する。君を無事に地球に、家に送ってあげる！」

優也

「・・・・・・ドラゴンコンボイ」

ドラゴンコンボイはデストロン軍の前に立つ。

ドラゴンコンボイ
「邪魔はさせないぞ、デストロン！」

次回に続く。

襲撃〔あらそい〕（後書き）

遂にサイバトロンとデストロンの戦いが始まった。

決断〔たすけたい〕（前書き）

よう、俺はベヒータスじゃーん！

えっ、どこかで聞いたことある台詞だって？

あ～ん、そんなこと気にすんなじゃん！

それより、俺はある疑問があるんだ。

『トランスフォーマー　アニメイテッド』と『スーパーロボット大戦』のアニメを観たんだけど・・・・・何で共同でやらないんだ？同じロボットアニメなのにな～。

そう思わねえか？

そんじゃ、『トランスフォーマーエレメントフォース』始まるぜ、トランスフォーム！

〔ベヒータス〕

決断〔たすけたい〕

【サイバトロン基地：ワープゲート前】

《ドカン！バカン！ドゴン！》

デストロンの砲撃は激しかった。

そんな砲撃を避けながら上空を飛行する戦闘機、ドラゴンコンボイとルビーウィング。

ドラゴンコンボイ
「ルビーウィング、避けながら奴らの攻撃を引き付けるんだ！」

ルビーウィング
「了解！」

ドラゴンコンボイ
「攻撃部隊はその隙に攻撃するんだ！無理に倒そうとするな！」

サイバトロン軍兵士達
「「「了解！」」」

ドラゴンコンボイ
「整備班、後どのくらいで終わるんだ？」

整備班のスタッフ
「あと１０分です！」

ドラゴンコンボイ
「わかった、時間を稼ぐ！終わったら、優也を優先に行かせる！座標は絶対に間違えるな！」

整備班
「「「了解！」」」

優也
「ドラゴンコンボイ！」

突然、優也がギアボルトの通信回線でドラゴンコンボイに呼び掛ける。

ドラゴンコンボイ
「優也、すまないな。とんだ帰国になってしまったな」

優也
「ドラゴンコンボイとルビーウィングで大丈夫なの？」

ドラゴンコンボイ
「心配するな、俺もルビーウィングもこれぐらいで墜ちやしない」

優也
「・・・・・・ドラゴンコンボイ」

ドラゴンコンボイ
「うん？」

優也
「・・・・・・地球に帰った後のエレメントジュエリー探しなんて、僕は・・・・・・・」

ドラゴンコンボイ
「・・・・・・そんな事は後だ。今は家に帰ることを考えとけ。大丈夫だ。俺達サイバトロンは後から必ず来る」

優也
「・・・・・・ありがとう」

ドラゴンコンボイが微笑むと、

「随分余裕ですね、ドラゴンコンボイ」

ドラゴンコンボイ
「！？」

ドラゴンコンボイの目の前に、戦闘機が飛んで現れ、

「トランスフォーム」

《ギゴガゴギゴガゴ》

スタースクリームにトランスフォームする。

ドラゴンコンボイ
「よう、スタースクリーム。貴様が来ていると言うことは・・・・・・奴も来ているのか？」

スタースクリーム
「はい、只今地上で大暴れしております」

＊

《ドカーン！》
「うわっ！」
《ドカーン！》
「グワッ！」
《ガガガガガガガガガガガガ》
砲台には砲身二本を備え、前面部分には刺々しい盾が備え付けられた強大な戦車が砲撃しながら突き進む。

バーストメガトロン
「フッハハハハハハハハ！！人間の子供は何処だ～？」

バーストメガトロンだった。

＊

ドラゴンコンボイ
「チッ！バーストメガトロンめ・・・」

スタースクリーム
「あの方のお目当ては『優也』という人間です。今は貴方に目はありません。その代わりにこのスタースクリームが代わりに相手します！」

《ビュン！》

ドラゴンコンボイ
「おっと！」

ドラゴンコンボイはスタースクリームのビームを避ける。

ドラゴンコンボイ
「それじゃ、とっとと貴様を倒して、バーストメガトロンに会おうか！」

《ビュン！》

ドラゴンコンボイはビームで反撃するが、スタースクリームは難なく避ける。

＊

ギアボルト
「しっかり掴まっていろ！」

優也
「うん！」

《キキィー！ブルルルルル！》

ギアボルトはスピードとテクニックでデストロンの砲撃を避ける。

そこへ、ベヒータスがギアボルトの前に立ちふさがった。

ベヒータス
「よう、ギアボルト」

ギアボルト
「ベヒータス！」

優也
「・・・・・・あれもデストロンなの？」

こっそり覗くと、

ベヒータス
「あっ、こいつ（優也）はダージの言っていた奴だな！」

ギアボルト
「チッ！」

《キキィー！ブルルルルルル！》
下がって、方向転換で疾走する。

ベヒータス
「当たりだな！バーストメガトロン様、人間の子供はギアボルトが乗せていやす！」
すぐさま通信回線で知らせる。

＊

バーストメガトロン
「そうか、わかった！」

《ドカドカドカドカドカドカ！！》
「「「うわっ！！」」」
バーストメガトロンはギアボルトを捜すためにサイバトロン攻撃部隊を押し退けながら突撃する。

＊

セイバーペガサス
「しまった！」

交戦中のセイバーペガサスはバーストメガトロンの進軍を許してしまったことに気づく。

セイバーペガサス
「すぐに奴を・・・」

「待て！」

セイバーペガサス
「はっ！」

目の前にダージがいた。

セイバーペガサス
「ダージか！」

ダージ
「久しぶりだな、裏切り者！」

ダージはいきなり剣を抜き、セイバーペガサスに斬りかかる。

《ガキィン！》

セイバーペガサスも翼からの剣を取り出し、ダージの剣を受け止める。

セイバーペガサス
「まだデストロンなんかに居たのか」

ダージ
「なんかとはなんだ！裏切り者に言う資格は無い！」

《ガキィン！ガキィン！ガキィン！》

両者は激しく剣を打ち合う。

＊

ギアボルトはまだ撃ち合いの中で疾走していると。

バーストメガトロン
「久しぶりだな、若造」

ギアボルト
「！」

バーストメガトロンが立ちふさがった。

バーストメガトロン
「トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

バーストメガトロンはロボットモードに変形する。

優也
「バ、バーストメガトロンだ！」

バーストメガトロンは優也に気づく。

バーストメガトロン
「貴様が人間の子供か？・・・・・・ちょっと待て、何故ワシの名を知っておる？」

優也
「え、えーっと・・・・・・」

バーストメガトロン
「ワシを知っているなら、話が早い。・・・・・・優也だったな？このワシのところへ来るのだ」

バーストメガトロンは手を差し出す。

ギアボルト
「断る！」

《キキィーッ！》

ギアボルトは瞬時に方向転換し、疾走しようとするが、

ベヒータス
「どりゃぁぁぁぁぁぁ！」

《ガッシャ！》

「「ワッ！？」」

ベヒータスはギアボルトを取り押さえる。

ベヒータス
「捕まえたぜ！」

バーストメガトロン
「良くやった」

《ガシッ、バキッ！》

ギアボルト
「ぐあっ！」

優也
「ギアボルト！うわっ！」

バーストメガトロンはギアボルトの戸を壊し、優也を捕まえる。

バーストメガトロン
「私はこの子（優也）に聞いているのだ。貴様ではない」

ギアボルトを睨み付ける。

バーストメガトロン
「さて、優也とやら。このワシと共にエレメントジュエリーを捜そう・・・」

「断る！」

《ブォォォォォォ！！》

バーストメガトロン
「うん？」

《ドカン！》

バーストメガトロン
「ぐおっ！」

ビーグルモードのベクターフェニックスは疾走し、バーストメガトロンに目掛けて体当たりをした。

バーストメガトロンは倒れそうになり、優也を放してしまう。

優也
「うわぁぁぁぁぁぁ！」

ベクターフェニックス
「トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ！パシッ！》

ベクターフェニックス
「大丈夫か？」

優也

「あ、ありがとう」

バーストメガトロンは持ち直す。

バーストメガトロン
「貴様は？」

ベクターフェニックス
「我が名はベクターフェニックス！エレメントジュエリーを集める使命を持つ巫女なり」

バーストメガトロン
「ほう、貴様がベクターフェニックスか」

ベクターフェニックスは剣を取り出し、バーストメガトロンに向ける。

ベクターフェニックス
「貴様、何故エレメントジュエリーのことを知っている？」

バーストメガトロン
「それは・・・・・・」

ベヒータス
「おい、これを見やがれ」

ベヒータスは押さえ付けているギアボルトを見せつける。

ベヒータス
「おい、ガキンチョ。テメーの持っているエレメントジュエリーを寄越しやがれ！さもないと、こいつを痛め付けるぜ！」

ギアボルト
「離せ！」

ベヒータス
「誰が離すか、バーカー！」

ギアボルト
「お前にだけは、バーカーって言われたくないよ。バーカー、バーカー！」

ベヒータス
「捕まってる癖に、偉そうなことを言うな。このバーカー、バーカー、バーカー！」

ギアボルト
「お前の方が、バーカー、バーカー、バーカー、バーカー、バーカー！」

ベヒータス
「バーカーって言う方がバーカーなんだよ。バーカー、バーカー、バーカー、バーカー、バーカー！」

ギアボルト

「お前だって言ってるじゃないか、バーカー、バーカー、バーカー、バーカー、バーカー、バーカー！」

ベヒータス
「お前も言った、バー・・・・・・」

「「やめんか！」」

ベクターフェニックスとバーストメガトロンが同時に怒鳴った。

バーストメガトロン
「お前達、二人はバーカーだ！」

ベクターフェニックス
「子供じみた口喧嘩する時点でな！」

ギアボルトとベヒータスは落ち込む。

バーストメガトロン
「話が逸れたな。ベヒータスの言う通り、人質は取っている。大人しくその子供とエレメントジュエリーを渡すのだ」

ベクターフェニックス
「・・・・・・断る！」

優也

「ベクターフェニックス！」

バーストメガトロン
「ほぅー」

ベクターフェニックス
「優也とエレメントジュエリーは宇宙の存亡に関わる人材だ。渡すわけにはいかない」

バーストメガトロン
「・・・・・・成る程な」

優也
「駄目だよ！ギアボルトを見捨てるなんて！」

ベクターフェニックス
「優也、君にはエレメントジュエリーを探すと言う使命がある。・・・・・・だから」

優也
「・・・・・・こっちからも言わせてもらうよ。・・・・・・・僕には出来ないよ」

ベクターフェニックス
「優也！」

優也
「僕にそんな大変なことはできるわけは・・・・・・」

ベクターフェニックス

「君はシャイニングダイヤモンドに選ばれたのだ！必ずできる！」

優也
「関係無いよ！僕は、不安なんだ！」

ベクターフェニックス
「そんなこと言わずに・・・・・・」

バーストメガトロン
「ああっ、お取り込み中に申し訳ないが、いいかね？」

ベクターフェニックスと優也はバーストメガトロンの方を向く。

バーストメガトロン
「・・・・・・なら、君と交渉しよう。ギアボルトを助けたいなら、私の元に来い」

優也はどうすれば良いか迷ってしまう。

その時、

《ピカッー！》

優也
「！？」

優也はポケットにあるシャイニングダイヤモンドが光っているのに気づき、取り出す。

ベクターフェニックス
「シャイニングダイヤモンドが輝いている！？」

バーストメガトロン
「おおっ、それがエレメントジュエリーか！？・・・・・・わかる、わかるぞ。エネルギーが・・・・・力を感じる！」

バーストメガトロンはシャイニングダイヤモンドの放つ輝きに力を感じ、喜ぶ。

優也も感じていた。

シャイニングダイヤモンドの伝えたいことを。

優也はバーストメガトロンのところに歩み寄る。

ベクターフェニックス
「行くな、優也！」

バーストメガトロン

「うむ、友を助ける方を選んだか。人間と言うのは優しいな（と同時に愚かだ）」

ベクターフェニックス
「駄目だ！シャイニングダイヤモンドを渡すな！」

ベヒータス
「こら、友達を助けるのを邪魔すんなんて最低だぞ、おばさん！」

ベクターフェニックス
「お、おばさん！？」

ベクターフェニックスは強いショックを受けた。

ベクターフェニックス
「だ、誰がおばさんだ！私はまだそんな歳ではないぞ！あと、人質を取る奴に『最低だぞ』と言う資格はないぞ！」

ベクターフェニックスは取り乱しながら怒鳴る。

ベヒータス
「あっ、そうか。悪ぃな、おばさん」

ベクターフェニックス
「ムキー！だから、おばさんではないって言っとるだろうが！！」

優也はベクターフェニックスを無視して、バーストメガトロンのところに歩み寄る。

優也はシャイニングダイヤモンドを差し出す。

バーストメガトロン
「そう、わかれば良い」

しゃがんで、優也とシャイニングダイヤモンドを取ろうとする。

その時、優也は目を閉じ、

優也
「ベクターフェニックス、ギアボルト、目を閉じて！」

と叫ぶ。

バーストメガトロンとベヒータスは驚く。

ベクターフェニックスとギアボルトは驚きながらも、言う通りに目を閉じる。

優也
「輝けシャイニングダイヤモンド！」

《ピカッアアアアアアアア！！》

バーストメガトロン
「ぐわっ！？」

ベヒータス
「まぶしい！？」

バーストメガトロンとベヒータスはあまりの輝きに目が眩んでしまう。

優也
「ギアボルト、今だ！」

ギアボルト
「よし、トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

すぐにロボットモードにトランスフォームし、

ギアボルト
「うりゃあ！」

《バッキ！》

ベヒータス
「あひっ！」

ベヒータスに回し蹴りを喰らわせる。

ギアボルトはすぐに優也のところに駆け寄る。

ギアボルト
「ありがとう、優也」

優也
「ううん、このシャイニングダイヤモンドが伝えてくれたんだ。『念じて、光を出すんだ。その光を利用して、友達を助けるんだ』って」

ギアボルト
「えっ、喋るの？そのシャイニングダイヤモンドは・・・・・・」

ベクターフェニックス
「言った筈だ。シャイニングダイヤモンドには意志があると」

ギアボルト
「そうだっけ？」

ベクターフェニックスは呆れ、優也は苦笑する。

バーストメガトロン
「おのれ～、小賢しい真似をしようって・・・・・・」

バーストメガトロンは優也に怒りを向ける。

「子供に怒りを向けるとは、みっともないぜ！」

空から高速に飛んでやって来たのは、

「「「「ドラゴンコンボイ！！」」」」

ドラゴンコンボイ
「トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ、ドーン！》

ドラゴンコンボイは優也とバーストメガトロンの間に着陸する。

バーストメガトロン
「ドラゴンコンボイめ～」

ドラゴンコンボイ
「貴様の相手はこの俺だ！」

次回に続く。

決断〔たすけたい〕（後書き）

遂に対峙したドラゴンコンボイとバーストメガトロン！

うまく戦闘描写を書けるかどうかわかりませんが、楽しみして下さい。

約束〔きかん〕（前書き）

ルビーウィング、質問を読み上げるわよ。

ペンネーム【百鬼丸】さんからの質問。

『地球についたドラゴンコンボイ達はスキャンし直しますか？』

そりゃ、地球にいるときは地球の乗り物にならなきゃあいけないわ。

質問ありがとうございました。

それじゃ、『トランスフォーマーエレメントフォース』始まるわよ、

トランスフォーム！〔ルビーウィング〕

約束〔きかん〕

【セイバートロン星】

ドラゴンコンボイとバーストメガトロンは対峙する。

ドラゴンコンボイ
「ギアボルト・・・」

ギアボルト
「戦うんですね？」

ドラゴンコンボイ
「ああ」

ギアボルト
「わかりました」

優也
「えっ・・・」

ギアボルトは優也を拾い上げる。

ギアボルト
「此処を離れよう。ベクターフェニックスも」

ベクターフェニックス

「あ、ああっ・・・」

ギアボルトに言われた通りに一緒に場を離れる。

優也
「助けないの？」

ギアボルト
「手を貸せば、かえって邪魔になる。あの二人の闘いはそうなんだ」

優也
「・・・あっ！」

優也の目に映ったのは、ドラゴンコンボイとバーストメガトロンの闘気だった。

さらに場を離れるベヒータスも見かける。

優也
（・・・・・・そういえば、夢の中での二人の闘いは凄かった）

優也は思い出し、納得した。

＊

「「はっ！」」

上空で戦うダージとセイバーペガサスも、ドラゴンコンボイとバーストメガトロンの闘気に気づいた。

ダージ
「・・・・・・始まったな」

セイバーペガサス
「ああっ」

＊

「ううっ・・・」

うつ伏せに倒れていたスタースクリームも気づいた。

スタースクリーム
「やれやれ、私と戦った後なのにバーストメガトロンに挑むとは・・・・・・。まあ、どっちが倒されても得をするのは私だ」

スタースクリームは腹黒く呟く。

＊

ドラゴンコンボイ
「ドラゴンアックス！」

ドラゴンコンボイは大型の斧を取り出す。

バーストメガトロン
「ジェノサイドバスター！」

二本の砲身を一つにする。

ドラゴンコンボイ
「うおおおおおおおおお！！」

ドラゴンアックスが赤く光り、ドラゴンコンボイは降り下ろすと赤い斬撃が飛ぶ！

バーストメガトロン
「喰らえええええええええ！！」

紫色のエネルギー弾をを発射する。

二つのエネルギーがぶつかり、

《ドカァァァァァァァァァァン！！》

激しく爆発する。

「「ぬおおおおおおおおお！！」」

《ガキィィィィィィン！！》

爆発を合図にするようにドラゴンコンボイとバーストメガトロンは互いの武器でぶつかり合った。

両者は一旦下がると、バーストメガトロンのジェノサイドバスターは二つに分離し、二本の剣になる。

ドラゴンコンボイ
「うりゃあ！」

バーストメガトロン
「はっ！」

《ガキィン！ガキィン！ガキィン！・・・》

ドラゴンコンボイとバーストメガトロンは激しく斬り合った。

優也は感じた。

優也
「・・・あれがトランスフォーマー同士の闘いなんだ・・・」

ベクターフェニックス
「・・・・・・私も感じる。アレぞトランスフォーマーの・・・・・・

・いや、ドラゴンコンボイとバーストメガトロンの闘いだ！」

ベクターフェニックスはそう感じた。

すると、ギアボルトの横から光る目が現れる。

「シャアアアアア！！」

《シュルルルルルルル、パシッ！》

優也

「えっ！？」

優也は目に見えないものに巻かれる。

《シュルルルルルルル！》

優也

「わっ！？」

ギアボルト

「優也！」

ギアボルトの元から、優也は連れていかれた。

＊

ドラゴンコンボイ
「優也！」

バーストメガトロン
「よそ見している場合か！」

《ガキィン！》

ドラゴンコンボイ
「くっ・・・」

ドラゴンコンボイはまだバーストメガトロンに手こずる。

＊

優也は宙に浮く。
いや目に見えない何かに巻かれてしまったのだ。

ベクターフェニックス
「何者だ、姿を見せろ！」

ベクターフェニックスとギアボルトは武器を構える。

《ジジッー・・・》

徐々に姿を現した。
それはデストロンのトランスフォーマーだった。
優也はトランスフォーマーの触手のような腕に巻かれて捕まっていた。

「俺の名は、『コラーダ』。秘密偵察員だ」

ベクターフェニックス
「姿を消せるトランスフォーマーか！？」

コラーダ
「そうさ、これ［ステルス能力］を使ってサイバトロン内を嗅ぎ回らせてもらった。お前の話した『エレメントジュエリー』やこのガキ［優也］のことをバーストメガトロン様に聞かせてもらったぜ」

ベクターフェニックス
「な、なんだと！？」

ギアボルト
「気づかなかったぜ！」

優也
「それでデストロンが襲撃しに来たのか・・・」

コラーダ

「そういうことだ」

ギアボルト
「優也を離せ！」

コラーダ
「嫌なこった。つーか、『離せ』って言われて離すバカはいるかよ」

ベクターフェニックス
「離さぬと、斬るぞ！」

コラーダ
「状況を見て、わからねぇのか？」

優也を見せびらかせる。

ベクターフェニックス
「くっ・・・」

今、手出しできない状況だった。

優也
（どうしよう・・・）

優也は辺りを見渡すと、一台の砲台があることに気づく。

優也は見覚えがあった。
特にレーザー砲に。

優也
（・・・・・・もしかして、レーザーウェーブ？）
そうレーザーウェーブである。
レーザーウェーブは頷くようにレーザー砲を動かす。
優也
（よーし、気をそらそう）
優也はコラーダを見て、思い付いた。
優也
「す、凄いんだ、コラーダって！」
コラーダ
「おっ、わかるか？なんせ、デストロン随一の偵察員だからな」
優也
「変身した姿も凄いの？」
コラーダ
「もちろん、他の奴とはまったく違うさ」
優也
「是非、見てみたいな」
ベクターフェニックス
「優也、何を言っ・・・」
優也をツッコもうとするベクターフェニックスだが、優也の真剣な

眼差しを見て思い留まった。

コラーダ
「後でな」

優也
「・・・・・・できないんだ」

コラーダ
「できる！よーし、見せてやるぜ」

優也を降ろす。

コラーダ
「コラーダ、トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

コラーダはコブラにトランスフォームした。

優也
「ええっ、乗り物じゃないんだ！」

優也は本気で驚いた。

コラーダ
「凄いだろう」

優也
「うん、凄いよ！・・・今だけ」

コラーダ
「何？」

《ビビィー！ドカァァァァァン！》

コラーダ
「うわっ！？」

レーザーウェーブのレーザーで、コラーダは吹き飛ぶ。

レーザーウェーブは優也の元に駆け付ける。

《ギゴガゴギゴガゴ》

優也
「レーザーウェーブ、ありがとう」

レーザーウェーブは照れる。

ドラゴンコンボイ
「うわっ！」

優也とレーザーウェーブは振り向く。

＊

ドラゴンコンボイはドラゴンアックスを手離し、バーストメガトロンに圧倒されてしまう。

バーストメガトロン
「ふっはっはっはっ、やはりスタースクリームとの戦いの後ではきつかったな」

ドラゴンコンボイ
「くっ・・・」

バーストメガトロン
「トドメだ」

ジェノサイドバスターをドラゴンコンボイに向ける。

＊

優也達はドラゴンコンボイのピンチに焦る。

優也
「駄目だ、負けないでドラゴンコンボイ！」

優也が叫んだ時、

《ピカッァァァァァァァァァ！！》

『シャイニングダイヤモンド』が輝いた。

優也

「えっ！？」

優也達は驚いた。

それぞれ戦っていた他のトランスフォーマー達も『シャイニングダイヤモンド』の輝きに注目した。

ベクターフェニックス

「これはもしや！」

『シャイニングダイヤモンド』の光は伸びていき、ドラゴンコンボイに当たった。

＊

バーストメガトロン

「な、なんだ！？」

バーストメガトロンは思わず、ジェノサイドバスターを反らしてしまう。

ドラゴンコンボイ
「ち、力が湧いてくる！」

ドラゴンコンボイは立ち上がった。

バスターメガトロン
「馬鹿な！？」

再びジェノサイドバスターをドラゴンコンボイに向ける。

バスターメガトロン
「喰らえ！」

バーストメガトロンはジェノサイドバスターを発射する。

ドラゴンコンボイ
「うりゃあ！」

《ズバッ！》

ジェノサイドバスターの光線を拳一突きで消滅させた。

バーストメガトロン
「そんな、ジェノサイドバスターを！？」

ドラゴンコンボイ
「・・・・・・俺も驚いたぜ」

ドラゴンコンボイは神速にバーストメガトロンに近づいた。

バーストメガトロン
「なっ！？」

ドラゴンコンボイ
「ドラゴンアッパー！」

《ドカァァァァァァァン！》

バーストメガトロン
「ぐおっ！」

バーストメガトロンは空高く吹き飛ばされた。

ドラゴンコンボイ
「・・・・・・本当にすげぇや」

すると、ドラゴンコンボイに通信が入ってくる。

＊

優也
「やった！ドラゴンコンボイが勝った！」

ベクターフェニックス

「ああっ、優也のおかげでな」

優也
「えっ、僕のおかげ？」

ベクターフェニックス
「優也の想いが『シャイニングダイヤモンド』に伝わり、ドラゴンコンボイに力を与えてくれたんだ。ダイヤモンドの意味は『純粋』だ。優也の純粋な想いが『シャイニングダイヤモンド』の力を発揮させたんだ。・・・・・・やはり君には素質がある」

優也
「・・・・・・そうなんだ」

優也は複雑な気持ちになる。

すると、ドラゴンコンボイがトランスフォームしてやって来る。

ドラゴンコンボイ
「優也、すぐに乗るんだ！ワープゲートの調整が終わった」

優也
「本当？」

ドラゴンコンボイ
「急ごう！」

優也は急いでドラゴンコンボイに乗り込んだ。

そしてドラゴンコンボイはすぐに飛び立つ。

「逃がさん！！」

《ガガガガガガガガガガガガ！！》

突然の大声に驚いたギアボルト達が振り向くと、トランスフォームしたバーストメガトロンが激走してくる。

「わっ！」

ギアボルト達を押し退けて、ドラゴンコンボイを追いかける。

ベクターフェニックス
「いかん！優也を狙っている！」

ギアボルト
「奴を止めろ！」

ギアボルト達はすぐにバーストメガトロンを攻撃する。

《ドカン！ドカン！ドカン！》

攻撃が当たり、ぼろぼろになっていくがバーストメガトロンは止まらない。

バーストメガトロン
「ふっはっはっはっ、素晴らしい！あれが『エレメントジュエリー』の力か！ますます欲しくなった！」
バーストメガトロンは欲に、『エレメントジュエリー』に目が眩んでいた。

＊

その様子を見ていたスタースクリームは、
スタースクリーム
「私も行きますか」

《ギゴガゴギゴガゴ》

トランスフォームして、追いかけようとするスタースクリーム。
ルビーウィング
「させるか！」

《ガキィン！》

ルビーウィングは自分の剣でスタースクリームに斬りかかるが、ス

タースクリームは自分の剣で防ぐ。

スタースクリーム
「邪魔をしないで下さい、このブス」

《プチっ！》

ルビーウィング
「誰がブスよ（怒）！」

ルビーウィング怒り全開で闘う。

＊

ドラゴンコンボイはやっとワープゲートにたどり着き、優也を降ろす。

《ジジッー！》

そして、ワープゲートの中心からワープの入り口が現れる。

ドラゴンコンボイ
「・・・・・・さあ、早く行くんだ」

優也
「・・・・・・ドラゴンコンボイ、やっぱり僕は・・・・・・」

ドラゴンコンボイ
「ありがとう助けてくれて。だから今度は俺が君を助ける番だ」

優也
「ドラゴンコンボイ」

バーストメガトロン
「逃がさん！」

ぼろぼろになったバーストメガトロンがやってくる。

ドラゴンコンボイ
「しつこいぜ！」

ドラゴンコンボイとバーストメガトロンは取っ組み合いをする。

ドラゴンコンボイ
「早く行くんだ！」

優也はワープゲートに向かって走る。

優也
「ドラゴンコンボイ、きっと来てね！」

ドラゴンコンボイ
「ああっ、約束だ！」

優也はワープの入り口に飛び込んだ。

優也
「うわぁぁぁぁぁぁっ！」

優也はくるくると回る。

＊

優也はすてんと転ぶ。

優也
「いてて・・・」

優也は辺りを見渡す。

空は夜になっていた。
そして見覚えのある通学路。

優也
「・・・・・・ここはいつも通る通学路だ！」

そう【地球】だった。

優也
「・・・・・・夢だったのかな・・・・・・」

優也はそう思うと、手に『シャイニングダイヤモンド』を持っていることに気づいた。

優也
「夢じゃない！」

優也は夜を眺める。

優也
「きっと来てね、ドラゴンコンボイ」

こうして優也は地球に帰還した。

終わり

約束〔きかん〕（後書き）

次回は人物紹介にします。

【登場人物】（前書き）

ここで、登場人物を紹介します。
ほとんどは人ではなく、トランスフォーマーですけど。

【登場人物】

〔サイバトロン〕

正義のトランスフォーマー達が集まっている。

ドラゴンコンボイとルビーウィング以外のほとんどはビークルモードは車系である。

【総司令官】

ドラゴンコンボイ

イメージCV：小山力也〔『名探偵コナン』毛利小五郎〕

《プロフィール》

サイバトロン総司令官を務めるトランスフォーマー。

普段は能天気な性格だが、間違っていることや非道な行いを許さない。　例え味方でも異議を唱える。

常に任務よりも大事なもの、守るべきものがあるという考えを持つ。

ビークルモード〔大型戦闘機・セイバートロンモード〕

武器・必殺技〔ドラゴンアックス・ドラゴンアッパー〕

【次元巫女】

ベクターフェニックス

イメージＣＶ：黒河奈美〔『真・恋姫†無双～乙女大乱～』関羽〕

《プロフィール》
すべての『エレメントジュエリー』を集める使命を与えられた巫女のトランスフォーマー。
正義感と真面目過ぎる性格ゆえ時々一直線に行き過ぎる所がある。
まだ若いのだが、老けて見えるというコンプレックスを持ち、可愛いものに弱いという少女らしいところがある。

ビークルモード〔不死鳥＋レースカー〕

武器・必殺技〔フェニックスソード・フェニックスバーニング〕

【狙撃手】
ギアボルト

イメージＣＶ：石井真〔『蒼穹のファスナー』真壁一騎〕

《プロフィール》
正義感の強い熱血漢ありすぎる戦士。
射撃の腕前はサイバトロン軍内でも一二を争うほど高い。
ドラゴンコンボイですら『馬鹿』と言われるほど頭はあまり賢くない。
しかし、その分純粋なので仲間達から信頼されている。

ビークルモード〔パトカー・セイバートロンモード〕

武器・必殺技〔ギアライフル・ギアブラスター〕

【航空士官】
ルビーウィング

イメージＣＶ：坂本真綾〔『空の境界』両儀式〕

《プロフィール》
メンバー内で最年少で、負けず嫌いな勝ち気な少女のトランスフォーマー。
自動車等の多いサイバトロン内では飛行できる数少ない戦士。
普段は強気なだが、打たれ弱いところがある。

ビークルモード〔戦闘機・セイバートロンモード〕

武器・必殺技〔ルビーライフル・ルビーフラッシュブレード〕

【作戦参謀】
セイバーペガサス

イメージＣＶ：石田彰〔『銀魂』桂小太郎〕

《プロフィール》
冷静沈着な性格で、正義感と信念が強いトランスフォーマー。
かつてはデストロンの戦士だったが、デストロンのやり方や考え方を間違っていると考え、ある代償を引き換えにしてサイバトロン

に寝返る。

武器・必殺技〔ウィングカッター・ジャスティストルネード〕

ビーストモード〔ペガサス〕

【技術者】

レーザーウェーブ

イメージＣＶ：なし

《プロフィール》

見掛けは怖そうに見えるが、小心者で無口。しかし技術力がとても優れているトランスフォーマー。

左腕はあらゆる種類のレーザーを発射できる。

ビークルモード〔レーザー砲・セイバートロンモード〕

武器・必殺技〔トリプルレーザーキャノン・パルスウェーブ〕

【女神】

ベクターシグマ

イメージＣＶ：雨宮侑布

《プロフィール》

トランスフォーマーの母とも呼ばれているセイバートロン星のメインコンピューター。
サイバトロンとデストロンの戦いを早く終わらせたいと考えている。
ドラゴンコンボイのことを信頼しているが、『年増』と呼ぶときは容赦なくお仕置きする。

〔デストロン〕
宇宙征服を企む悪のトランスフォーマーの軍団。
ビークルモードは戦闘兵器ばかりだが、ビーストモードも希にいる。

【破壊大帝】
バーストメガトロン

イメージCV：石塚運昇〔『ポケットモンスター』オーキド博士〕

《プロフィール》
狂暴なトランスフォーマー達を統べている破壊大帝。
持っている力を支配の為に使うべきと考えている。
ドラゴンコンボイより歳上だが、宿命のライバルと認めあっている。

ビークルモード〔戦車・セイバートロンモード〕

武器・必殺技〔キャノンソード・ジェノサイドバスター〕

【航空参謀】
スタースクリーム

イメージＣＶ：日野聡〈『ゼロの使い魔』平賀才人〉

《プロフィール》
密かにバーストメガトロンの地位を狙っている野心家。
敵には毒舌を放つが、部下には思いやりと厳しさ言う。
かつてはセイバーペガサスの同期だった。

ビークルモード〔ジェット機・セイバートロンモード〕

武器・必殺技〔ビームマシンガン・ナルキャノン〕

航空隊長：ダージ

イメージＣＶ：鈴村健一〈『銀魂』沖田総悟〉

《プロフィール》
若くして、航空部隊の隊長を務めるトランスフォーマー。
ある大きな敗戦により多くの仲間や左目を失っている。
その原因であるセイバーペガサスを恨んでいる。

ビークルモード〔戦闘機・セイバートロンモード〕

武器〔ダージライフル・ブルートルネード〕

【破壊兵】
ベヒータス

イメージCV：高木渉〔『名探偵コナン』高木刑事／小嶋元太〕

《プロフィール》
猪のような顔つきが特徴のトランスフォーマー。
かなりのパワーと破壊力を備えている。
あまり頭は良くないが、バーストメガトロンに忠実で、他のデストロンとも仲が良い。
よくダージとコンビを組んでいる。

ビークルモード〔装甲車・セイバートロンモード〕

武器・必殺技〔ファングボム・ノウズブレス〕

【秘密偵察兵】
コラーダ

イメージCV：鳥海浩輔〔『薄桜鬼～碧血録』斎藤一〕

《プロフィール》
ビーストモードとステルス機能を使って、サイバトロン基地に侵入して情報探っていた。

自慢したがりな性格なのが、たまに傷らしい。

ビーストモード〔コブラ〕

武器・能力〔テイルウイップ・ステルスモード〕

〜〔人間（地球人）〕〜

トランスフォーマー達の舞台となる地球に住んでいる人々。

荒神優也

イメージＣＶ：平田宏美〜〔『真・恋姫†無双〜乙女大乱』魏廷〕〜

《プロフィール》

エレメントジュエリーに選ばれてしまった少年。

勉強と運動が苦手な気弱い少年だが、その分心優しい。

現在、エレメントジュエリーを集めるというあまりに重い使命を背負ってしまう。

火鈴

イメージＣＶ：小見川千明〜〔『ソウルイーター』マカ＝アルバーン〕〜

《プロフィール》

優也の幼なじみで、いつも気弱い優也に活を入れてあげている元気の良い少女。

荒神賢人

イメージＣＶ：黒田崇也〜『デュララララ！！』サイモン・ブレジネフ〜

《プロフィール》
会社の社長を務めている優也の父。
婿養子でもある。
いつも優也に厳しくしている。

【登場人物】（後書き）

いかがでしたか？

声優やビークルモードにこだわりました。

再会〔よろこび〕（前書き）

明けましておめでとう！・・・って遅いか。

『トランスフォーマー　アニメイテッド』の放送が終わってしまったな。

できれば、この『トランスフォーマーエレメントフォース』を応援してくれ！

それじゃ、今年初の『トランスフォーマーエレメントフォース』を読んでくれ！

トランスフォーム！〔ドラゴンコンボイ〕

再会〔よろこび〕

【宇宙】

青い星、地球。

そんな地球に接近するものがいた。

それは赤く光る飛行物体だった。

物体は大気圏に突入した。

【地球：上空】

テスト飛行をしていたジェット戦闘機『スーパー・ホーネット』。

スーパー・ホーネットは赤い飛行物体と鉢合わせする。

赤い飛行物体はスーパー・ホーネットの上を通り過ぎる。

《ウィーン・・・》

その時、赤い飛行物体からセンサーのようなものを浴びる。

「・・・・・・なかなかいい機体ですね」

そして、何処かに消えてしまう。

【通学路】

トランスフォーマーと遭遇し、『エレメントジュエリー』を集めるという使命を背負った地球の少年、荒神優也は元気なく登校する。

優也

「あれから、どうしたのかな」

優也はセイバートロン星での出来事を思い出す。

【優也の回想】

あの後（地球に帰ってきた後）、夜になってしまったので家に帰ると・・・・・居なくなった僕のことを心配していた祖父と家政婦の秋子さんが居た。

祖父は真っ先に抱きしめた。

後で叱られた。

どうやら、夜までしか経っていなかったらしい。

居なくなった理由を聞かれて困った。

『シャイニングダイヤモンド』がセイバートロン星へ連れていってくれたなんて言える筈がなかったので・・・・・、

僕は思わず、

「体育での連携が上手くなるように特訓していた」

と嘘をついた。

祖父と秋子さんは疑った。

しかし追及することなく、

「次から気を付けなさい」

と注意された。

【現在】

優也は片腕をめくり、紋章を見る。

これは腕輪の仮の姿である。

優也

「・・・・・・これなら確かに不便にならないけど、目立つな」

と溜め息をつく。

優也

「今の問題は・・・・・・学校だ」

あの日、学校を無断欠席したので、どう説明すれば良いのか悩んだ。

優也

「・・・・・・遅れるといけないから、行きながら考えよ」

優也は走っていく。

すると、怪しい二つの光が輝いた。

「アイツに間違い無いぜ」

【学園】

広大な土地にとても大きく立派な校舎と広いグランドがある。
この大きな学園には中等と小等分けられている。
優也は小等である。

【優也の教室】

優也が席に着き、教科書を入れていると、
「おい、荒神」
数名のクラスメイトが囲んでいた。
「昨日のテストは大丈夫かな？」
優也
「えっ、ええっと・・・・・・」

「聞くまでも無い、赤点だよ」

「そうだよな、こいつ頭良くないからな」

「あなた、本当にあの“荒神”グループの子供かしら？」

優也はムッとする。

すると、

「全員席に着け！」

怒鳴りと共に教室に入ってきたのは、熱血漢ある金髪の男性だった。

名は『炎山勝利』。優也のクラス担任の先生である。

炎山の言葉で全員自分の席に座る。

炎山は教卓に立つ。

炎山

「授業を始める前に・・・・・・荒神優也！」

優也
「（慌てて立って）は、はい！」
炎山
「昨日のテストの結果、お前は赤点だ！」
「「「わっはっはっはっ・・・」」」
生徒達の笑いが木霊し、優也は赤くなる。
炎山
「静かに！放課後、お前は居残りだ」
優也
「ええっ！？」
炎山
「但し、昨日の授業の分を教えるため、放課後は残るように」
優也
「ええっ！？」
炎山
「周りが良い点を取っているいるのに、お前が赤点とは嘆かわしい。
貴重な時間を割いて、授業してやるのだ、ありがたいと思え」
優也

「は、はい・・・」

生徒達はクスクス笑う。

炎山

「それじゃ、授業を始める。教科書開け」

こうして優也は居残りする事となった。

＊

そんな教室の様子を、遠くから覗くように見ている赤い目が光る。

「あの坊主、笑われているな。・・・・・しばらく様子を見るか」

＊

時間が経ち、放課後になる。

優也は言われた通り、残って炎山の授業を受けていた。

優也は頭をひねった。
とても難しい授業らしい。
炎山は厳しく優也に教える。
そして時間が経つ。

【学園のグラウンド】

もう夕方になっていた。
優也はぐったりと歩いて帰宅しようする。
優也
「・・・・・・難しかった・・・・・・・」
《キィーン》
「うん？」
優也は空を見上げると、赤いジェット戦闘機『スーパー・ホーネッ

ト』が上空に飛んでいた。

優也

「・・・・・・この展開、前にあったぞ・・・・・・」

「トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

スーパー・ホーネットはデストロン“スタースクリーム”だった。

《ドーン！》

優也の前で着地した。

優也

「やっぱり！」

優也は驚愕する。

スタースクリーム

「・・・・・君が荒神優也君だね？初めまして、私はデストロンのトップのスタースクリームです」

優也
「えっ、デストロンのボスは“バーストメガトロン”じゃ・・・・」

スタースクリーム
「あの方は・・・・・・死にました」

優也
「ええっ！？」

スタースクリーム
「あの闘いの後、ぼろぼろになったバーストメガトロンはドラゴンコンボイと闘いました。その時、ワープゲートが暴走してしまいましてね・・・・・・二人は飲み込まれました」

優也
「ドラゴンコンボイが！？」

スタースクリーム
「ですから、私がデストロンのトップになりました」

優也
「そんな・・・・」

優也は落ち込む。

スタースクリーム
「落ち込んでいるところを申し訳ありませんが、拘束させてもらうよ」

《シュルシュル！》

優也
「うわっ！」

優也は縛られる。

優也を縛っていたのは、

《ジジーッ》

コラーダだった。

ステルスモードを解除して、姿を現した。

コラーダ
「久しぶりだな、小僧」

優也
「・・・コラーダも来ていたのか？」

コラーダ
「スタースクリーム様の言いつけで今日までお前を見張っていたよ。
捕まえるタイミングを見計らってな」

スタースクリーム

「私がトップになっても、デストロンの目的である、全てエレメントジュエリーを手中に納めるは変わりません。ですから、あなたを利用させていただきます」

優也
「嫌だ！デストロンなんかに協力するものか！」

コラーダ
「・・・・・・言うこと聞かせるために痛め付けて良いですか？それに、俺はこいつには借りがありますから」

スタースクリーム
「・・・・・・殺さない程度にしなさい」

コラーダ
「了解」

《ぐぐぐっ・・・》

優也
「うっ・・・」

コラーダは優也を締め付ける。

コラーダ
「言うこと聞かないと、もっと苦しむぜ」

優也

「い、嫌だ！」

コラーダ
「強情なガキだな」

《ぐぐぐっ・・・・》

優也
「ううっ・・・・」

スタースクリーム
「やり過ぎるなよ。・・・・・・・諦めたらどうだね？」

優也
「・・・・・・ここで諦めたら、助けてくれたドラゴンコンボイやサイバトロンの皆を裏切っちゃうよ・・・・」

スタースクリーム
「だから死にましたよ」

優也
「そんなの・・・・・・・信じるものか！」

優也が叫んだその時！

《ギャアオオオオオオオオオオン！》

突然の唸り声にスタースクリームとコラーダは驚く。

スタースクリーム
「な、何だ！？」

空を見上げると、月から大きな影が映し出される。

影が急速近づいてくる。

影の正体は、赤い翼竜だった。

スタースクリーム
「あれは！？」

《ドカン！》

「「うわっ！？」」

急降下した赤い翼竜は勢いを利用した体当たりでスタースクリームとコラーダを吹き飛ばす。

この時、コラーダは優也を離してしまう。

「うわっ！」

優也が高く浮いて、落ちそうになる。

「トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ、パシッ！》

赤い翼竜はトランスフォーマーだった。

瞬時に人型に変形し、手で優也を受け止める。

優也

「ううっ・・・」

「大丈夫か、優也？」

優也は目を開けて、声をかけたトランスフォーマーを見て、思わず涙を流した。

優也

「ド、ドラゴンコンボイ！」

そう、彼はドラゴンコンボイだった！

ドラゴンコンボイ

「遅くなってすまないな、優也」

次回に続く。

再会〔よろこび〕（後書き）

新たな姿になったドラゴンコンボイを見てくれ！

紅竜〔あたらしいすがた〕（前書き）

こんにちは、優也です。

ついにドラゴンコンボイが登場した。

けど、これはまだ序章にすぎないだって、どうなるんだろう。

でも僕は信じているよ、ドラゴンコンボイを。

それでは、トランスフォーム！〔優也〕

紅竜〔あたらしいすがた〕

〔前回の話〕

優也の前に、デストロンのスタースクリームとコラーダが現れて、ピンチに陥る。

その時、空から赤い翼竜が飛んできて、優也を助ける。

その赤い翼竜は、ドラゴンコンボイだった。

【グラウンド】

《ビュウウウウウウウウウウウウ！》

ドラゴンコンボイは離れた場所まで飛んでいき、優也を降ろす。

ドラゴンコンボイ
「此処にいてくれ」

優也
「うん！」

《ビュウウウウウウウウウウウウ！》

ドラゴンコンボイは飛んで元の場所に戻り、スタースクリームと対峙する。

スタースクリーム
「ドラゴンコンボイ、まさか生きていたとは……」

ドラゴンコンボイ
「生憎、俺は悪運が強いんでね」

コラーダ
「お前が生きているってことは、バーストメガトロン様は生きているのか！？」

ドラゴンコンボイ
「……わからない」

コラーダ
「何！？」

ドラゴンコンボイ
「確かにバーストメガトロンと供に『ワープゲート』に呑み込まれた。そして……ワープする間に別れ別れになった」

スタースクリーム
「……そうですか……」

ドラゴンコンボイ
「俺は、アイツが死んだとは思っていない。アイツは執念深く、しぶとい。そして・・・・・この俺を倒すまで死ぬような玉ではない」

スタースクリーム
「……それは誉めているんですか？」

ドラゴンコンボイ
「別に誉めてない。正直に述べただけだ」

スタースクリーム
「……それでは私も正直に述べましょう。……このままいなければ、私は永遠のトップだ、嬉しいな」

コラーダ
「ちょっと、スタースクリーム様！」

スタースクリーム
「だって、バーストメガトロンがいないおかげで、私はトップでいられるんですから」

ドラゴンコンボイ
「……ずいぶん薄情だな、バーストメガトロンに会ったら言い付けようかな～」

スタースクリーム
「その必要はありません。何故なら…」

《ガチャ！》

スタースクリーム
「あなたは此処で倒れるんですから！」

《バシュン！》

スタースクリームはドラゴンコンボイに目掛けて、必殺技『ナルキャノン』を発射する。

「ドラゴン…」

《ガシュン》

「アックス！」

《バシュン、ドカァァァァァァァァン！！》

ドラゴンコンボイは武器の『ドラゴンアックス』を瞬時に持ち、ナルキャノンの光線を真っ二つに両断し、地を割ってしまう。

《シュルシュル、バシッ！》

コラーダは隙を狙い、『テイルウィップ』でドラゴンコンボイの身体にを巻き付ける。

《ガシッ！》

「ぬっおおおおおおおお！！」

《ぐるぐるぐるぐる…》

『テイルウィップ』を片手で掴んだドラゴンコンボイはそのまま自らを回転させる。

「め、目が回る～…」

コラーダが目を回すと、『テイルウィップ』が緩む。

「そりゃ！」

《ぶん！》

スタースクリーム
「なっ！？」

《バキッ！》

「「ぐわっ！！」」

スタースクリームに目掛けて、コラーダを放り投げ、一気に二人を倒す。

ドラゴンコンボイ
「トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

ステルス機に変形し、

「バーニングドラゴンアタック！」

《ゴオオオオオオオオオオ、ドカン！》

「「ぐわっ！！」」

自らに炎を発生させ、高速な飛行でスタースクリームとコラーダに突進して、吹き飛ばす。

スタースクリーム
「ひ、引き上げだ、トランスフォーム！」

コラーダ
「さ、賛成！トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

スタースクリームは空に飛んで、コラーダは姿を消して退却した。

ドラゴンコンボイ
「トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

ロボットモードに変形する。

優也
「ドラゴンコンボイ！」
優也はドラゴンコンボイの元に駆け寄る。
優也
「死んだって聞かされたけど、無事だったんだね」
ドラゴンコンボイ
「ああっ、この通りピンピンしてるよ」
優也
「良かった。……けど、どうするこのグラウンド？」
グラウンドにはスタースクリームの着地後、ドラゴンアックスの割った後、そして『バーニングドラゴンアタック』の爆発後があって、酷くなっていた。
ドラゴンコンボイ
「……良いアイディアがある」
優也
「良いアイディア？」
ドラゴンコンボイ
「まずは、トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

ステルス機〔Ｂ－２スピリット〕に変形する。

ドラゴンコンボイ
「乗ってくれ」

と乗降口を開ける。

優也は言われた通りにドラゴンコンボイに乗り込む。

優也
「それでどうするの？」

ドラゴンコンボイ
「……このまま」

《ビュゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！》

ドラゴンコンボイは空高く飛び発つ。

優也
「逃げるの！？」

空は優也のツッコミが響く。

＊

「さっきから物音がしたが、何なん…」

優也の担任の炎山が出てみると、壊滅したグラウンドを目にする。

炎山

「……何なんだこれは！？」

驚愕し、叫ぶのだった。

【山の中】

此処は山奥。

ドラゴンコンボイは此処まで飛んできたのだ。

ドラゴンコンボイ

「いやぁ～、危ないところだったな～」

優也

「って、逃げただけじゃない！」

のんきに座り込むドラゴンコンボイにツッコミを入れる優也。

ドラゴンコンボイ
「仕方ないだろう、優也以外の人間に見つかるわけにはいかないんだから」

優也
「せめて、グラウンドを元に戻してからにしてよ！」

ドラゴンコンボイ
「無茶を言うなよ。俺は戦闘用だからね。それに作業用でも短時間に修復は無理だよ」

優也
「そ、それは……」

優也も納得する。

ドラゴンコンボイ
「納得したところで、話を戻そう」

優也
「話は逸らしていないよ」

ドラゴンコンボイ
「優也、無事で良かった」

優也
「……こちらこそありがとう、ドラゴンコンボイ」

ドラゴンコンボイ
「奴らも君を破壊つもりは無かっただろうが、よく屈しなかった」

優也
「……だって、サイバトロンを……ドラゴンコンボイを信じていたから」

ドラゴンコンボイ
「……ありがとう」

優也
「そういえばドラゴンコンボイ、竜にも変形できるんだ」

ドラゴンコンボイ
「ああっ、地球に到着した後に『スキャン』したんだ」

優也
「スキャン？」

ドラゴンコンボイ
「トランスフォーマーは惑星に降り立つ際に、その惑星の適性に合わせるために乗り物や生き物のデータをインプットし、変身できるようになるんだ。地球にいるときはカモフラージュしなきゃならないからな」

優也
「そういえば、ドラゴンコンボイの乗り物は、前に見たときと形が違っていた」

ドラゴンコンボイ

「地球（ここ）では、『ステルス』と言うらしい。新たに得た姿も、『竜』っと言うらしい」

優也
「ドラゴンコンボイと同じだね」

ドラゴンコンボイ
「同じ？」

優也
「『竜』を英語で『ｄｒａｇｏｎ〔ドラゴン〕』って言うんだ」

ドラゴンコンボイ
「英語？」

優也
「地球には色んな国があって、その国の言葉や文字があるんだ」

ドラゴンコンボイ
「なるほど、地球には色々とあるんだな」

優也
「それで、ドラゴンコンボイ」

ドラゴンコンボイ
「なんだい？」

優也
「これからどうするの？」

ドラゴンコンボイ
「どうするって、もちろん君を守るんだよ。影ながらね」

優也
「その影ながらをどうやってやるの？」

ドラゴンコンボイ
「さっき言ったように、カモフラージュの為に地球の乗り物をスキャンしたんだ」

優也
「……ステルス機じゃ、かえって不自然だよ」

ドラゴンコンボイ
「えっ？」

優也
「車なら上手く誤魔化せるけど、ステルス戦闘機だと相当に怪しまれるよ」

ドラゴンコンボイ
「……トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

ドラゴンモード（ビーストモード）に変形する。

ドラゴンコンボイ

「ならば、ドラゴンモードに…」

優也
「ドラゴンは空想上の生き物だから、余計に不自然だよ！」

ドラゴンコンボイ
「……地球人とは、細かいことを気にするんだな」

優也
「いや、細かく無いって《びしっ！》」

ドラゴンコンボイ
「それより優也、早く家に帰った方が良いんじゃないか？送ってやろう」

優也
「だ、駄目だよ！ドラゴンコンボイは目立ちすぎる。一人で帰れるよ」

優也は鞄を背負い、山を降りようとする。

優也
「ドラゴンコンボイ、本当にどうするの？」

ドラゴンコンボイ
「心配するな。上手く隠れるよ」

優也
「う、うん、わかった。また明日」

ドラゴンコンボイ
「ああっ、また明日な」
優也は心配しつつ、山を降りて家に帰るのだった。

【早朝：優也の家のリビング】

優也
「おはよう～」

祖父
「優也、大変じゃぞ」

優也
「えっ？」

祖父
「テレビを観てみ」

優也はテレビを観る。

＊

「昨日の夕方、学園のグラウンドが破壊されたという衝撃な事件が

発生しました。その現場を映します」

ドラゴンコンボイとスタースクリームの戦いで破壊されたグラウンドが映し出される。

＊

祖父
「間違いなく、学園だぞ！昨日の夕方、お前が帰るときではないか！？気がつかなかったのか！？」

優也
「う、うん、気がつかなかったな～」

祖父
「そうか、無事でなりよりだ」

優也は内心焦るが、何とか誤魔化せて、ホッとする。

「大旦那様！」

家政婦の秋子が入ってくる。

秋子
「たった今、学園からご連絡がありました。今日は休校になったそうです」

祖父
「当然だろう。学園のグラウンドがあんなことになってはな」

「緊急ニュースです！」

優也達は再びテレビを観る。

＊

「〇×区の駐車場にステルス機が停まっているという、またも衝撃的なニュースが入ってきました」

「「「ステルス機！？」」」

優也は嫌な予感がした。

駐車場の映像が映し出される。

予感が的中した。

ビークルモードのドラゴンコンボイだった。

＊

祖父
「本当じゃ、ステルス機じゃ！」

秋子
「しかも赤いですね」

唖然する優也は心の中で、
「何やってんの！？」
とつっこむのだった。

次回に続く。

紅竜〔あたらしいすがた〕（後書き）

常識の無いドラゴンコンボイが、問題起こした！

果たして、どうなることやら…。

警部〔きれもの〕（前書き）

どうも、デストロンの航空隊長のダージです。

“百鬼丸”さんから質問です。

『サウンドウェーブは出て来ますか？』

残念ながら出ないらしいです、ごめんなさい。

それでは『トランスフォーマーエレメントフォース』の始まりだ、トランスフォーム！〔ダージ〕

警部〔きれもの〕

【アメリカの軍事基地】

時刻は深夜に回っていたので、基地は静かであった。
しかし、二人の軍人が辺りを見回っている。
そんな時、夜空から二つの光が降ってくる。
降り立った二つの光が消え、正体が露になる。
『デストロン』のダージとベヒータスだ。

軍人1
「なんだ、あの光は!?」

光に気づいた軍人二人はすぐに駆けつけて、ダージとベヒータスに出会す。

軍人1
「な、なんだ!?」

軍人2
「て、手を上げろ!」

銃を構えて威嚇する。

《むずむず～》

すると、ベヒータスはむずむずして、様子が変だった。

ダージ
「どうした？」

ベヒータス
「・・・・・・てへっ」

《ブブーーーッ！》

ベヒータスの尻から煙が、屁が出る。

「「オ～マイガ～！！？」」

あまりにもの臭さにより二人軍人は気絶する。

ダージ
「い、いきなりそれはないだろ」

鼻を抑えながらツッコム。

ベヒータス

「いや～来る途中で急に腹の具合が・・・」

ダージ
「・・・・・・まぁ、騒ぎを防げたから良しとするか」

気絶する軍人を見て割り切る。

ダージ
「それに、ここは軍事基地みたいだ。ここの兵器をスキャンしよう」

ベヒータス
「了解だ」

ダージとベヒータスはスキャンする兵器を探す。

ダージ
「おっ」

ダージが目をつけたのは、『Ｆ－２２［ラプター］』だ。
究極のジェット戦闘機である。

ダージ
「こいつにしよう。スキャン！」

片目からスキャンの光を放ち、ラプターをスキャンする。

ダージ
「よし、トランスフォーム」

《ギゴガゴギゴガゴ》

ダージは青いラプターに変形する。

ベヒータス
「おーい、俺のも見てくれ。トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

ベヒータスは緑色のストライカー装甲車に変形する。

ダージ
「突撃好きのお前らしいな」

ベヒータス
「だろう？」

ダージ
「行くか？」

ベヒータス
「おおっ！目指すは『日本』だ！」

ベヒータスはすぐに走り出し、

《ガシャン！》

扉をぶち壊して行ってしまう。

ダージも一緒に飛び去る。

【駐車場】

駐車場には人だかりが多かった。

それもそのはず。

ステルス爆撃機〔ドラゴンコンボイ〕が駐車場に止まっていたからだ。

車ではなくステルス爆撃機が止まっているから当たり前である。

《ファン！ファン！ファン！》

すると、パトカー数台が走ってやって来る。。

パトカーから警察官数人が降り、人だかりを割り込んで、ドラゴンコンボイを見て驚愕する。

警官1

「ほ、本当に爆撃機だ！」

警官2
「いたずらかと思っていたが・・・」

「何をしているの？」

後から、銀色の長髪で瞳の色が赤い褐色の女性がやって来る。

「「警部」」

女性は『警部』と呼ばれた。

彼女は警視庁捜査一課の警部『レティシア・北郷』である。

レティシア
「・・・・・本当だったのね」

冷静な彼女も、実際に見れば驚く。

レティシア
「学園のグラウンドが破壊されたという大規模な事件から日が経っていないのに、駐車場にステルス機が止まっている奇怪な事件が発生するなんて」

どうやら、ドラゴンコンボイとスタースクリームの戦闘により破壊された学園のグラウンドは大規模な事件として扱われている。

レティシアはステルス機〔ドラゴンコンボイ〕をじっくり見て考える。

レティシア
「どうやってこんな狭い駐車場に止めたのかしら？いや、それ以前に周りがどうして気づけなかったな？止めたのではなく、此処で組み立てたのかしら？いや、それも周りが気付くはずよ」

理論と常識に考えるがわからなかった。

＊

急いでやって来た優也はこっそりとその様子を見ていた。

優也
「ドラゴンコンボイ、何で駐車場に止まったりしたの？」

優也は呆れてしまう。

「優也」

優也
「わっ！？」

優也の後ろから声を掛けたのは、幼なじみの火鈴だった。

火鈴

「なにやってんの？」

優也
「か、火鈴、驚かさないでよ」

火鈴
「普通に声を掛けただけじゃん。優也もステルス機を見に来たのか？」

優也
「う、うん」

火鈴
「良し、見に行こう」

火鈴は優也の手を引き、人混みに。
そしてしゃがんで足元へ潜り込む。

優也も一緒に潜り込む。

覗けば、警察官達がドラゴンコンボイを徹底的に調べる様子だった。

優也と火鈴はレティシアを見て驚く。

火鈴
「姉御！」

レティシア
「（振り向き）火鈴、優也」

この三人は知り合いである。

レティシアは二人に駆け寄る。

レティシア
「どうしたの、二人共？学校は？」

火鈴
「行く前にステルス機を見に来た」

優也
「僕は休みです」

レティシア
「ああっ、あなたの学園は大変なことになったんだよね」

火鈴
「私もテレビで観たけど、凄く破壊されてたね。アレ〔ステルス機〕も凄いけど」

レティシア
「人の力じゃない、何か凄い力で破壊されたと考えているのよ」

火鈴
「人の力じゃない・・・・・・巨大なロボットが暴れたりして」

優也
（ギクッ！）

レティシア

「巨大なロボットね・・・・・・ってんな訳ないでしょ」

火鈴
「そうだね。そんなアニメみたいなことはないか」

優也
「う、うん。今の科学はまだそんなに進歩してないよ」

火鈴の冗談が的中したので、優也は内心焦る。

再びステルス機〔ドラゴンコンボイ〕を見て、レティシアあることを想像する。

巨大なロボットが此処にやって来て、ステルス機に変形した。

それなら謎が解けると思うが、そんなわけがないと想像を打ち払う。

レティシア
「詮索より、あれをどうするかが問題ね」

火鈴
「持ってちゃうの？」

レティシア
「違法駐車でね」

優也
「でも、車じゃなくてステルス機だから、違法駐車にならないですよね？」

レティシア
「それじゃ、違法投棄ね」

火鈴
「あのステルス機、かなり新しいよ。棄てるなんてあり得ないって。ステルス機なだけに」

レティシア
「上手いわね。わかったわかった、それじゃ・・・」

《ファンファン！》

突然、一代の最新式のパトカーが走ってやって来る。

『大変です！向こうで銀行強盗事件が発生しました！至急応援を要請します！』

レティシア
「銀行強盗！？って、何で直接報せに来るの？携帯電話で連絡した方が・・・」

『携帯電話？そんな細かいことは気にしないで！速く現場に急行してください！』

レティシア
「いや、ステルス機〔ドラゴンコンボイ〕は？」

『専門の者が代わりにやります。速く来て下さい！』

レティシア
「わ、わかったわ」
レティシアと警察官二人はあわててパトカーに乗り込む。
『案内します！』
《ブロロロロロッ！！》
最新式のパトカーが先導し、レティシアは行ってしまう。
火鈴
「ずいぶんせっかちなパトカーだったな。カッコいいけど」
優也
「どこかで聞いたような声だったな」
《ブオオオオオオオオッ》
すると、駐車場に音波のようなものが発せられる。
《バタッ！バタッ！バタッ！バタッ！バタッ！》
人々が次々と倒れる。

優也
「アレ？」

《バタッ！》

火鈴も優也の隣で倒れる。

優也
「火鈴！？」

火鈴
「くーっ」

寝ていた。

優也
「寝てる？もしかして、他の皆も？」

よく見れば、人々は火鈴と同じように寝ていた。

すると、優也はあるものに気づいた。

それは紫色の大型の改造車だった。
上にレーザー砲を載せた特徴的だった。

優也はレーザー砲に見覚えがあった。

優也
「もしかして、レーザーウェーブ？」

《ギゴガゴギゴガゴ》

レーザーウェーブだった。

ドラゴンコンボイ
「レーザーウェーブ！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

ドラゴンコンボイも変形する。

「まったく、あなたは何をやっているんですか？」

ビークルモードのベクターフェニックスもいつの間にかいた。

優也
「ベクターフェニックス！」

ベクターフェニックス
「トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

優也
「いつ来たの？」

ベクターフェニックス
「お前が地球に帰った後、デストロン軍が引き上げた後に此処へ着いたのだ。地球の情報収集していた時に、ドラゴンコンボイと思われるニュースを知ってな。来てみれば案の定だった。そこでパトカーにスキャンしたギアボルトで彼ら〔警察〕を誘き寄せ、レーザーウェーブの特殊音波で優也以外の人間を眠らせたのだ」

優也
「あのパトカーはギアボルトだったのか！」

ベクターフェニックス
「まったく目立たないように行動しなければならないのに、早速目立ってどうするんですか！（怒）」

ドラゴンコンボイ
「面目無い」

優也
「まあまあ、仕方がないよ。ドラゴンコンボイは何の準備もしていなかった時に此処へやって来たんだから」

しかし、ベクターフェニックスはドラゴンコンボイをまだ叱り続ける。

優也は寝る火鈴を見て、気づく。

優也
「いけない、火鈴は学校があるんだ。遅刻しちゃう！」

その時、レーザーウェーブを見て思い付く。

優也
「レーザーウェーブ、お願いがあるんだけど」

レーザーウェーブは首を傾げる。

＊

火鈴が通う小学校にビークルモードのレーザーウェーブがやって来る。

優也が降りて、火鈴をそっと運ぶ。
そして火鈴をこっそり校門に座らせ、またレーザウェーブに乗って去ってしまう。

優也は火鈴を遅刻させまいと、レーザーウェーブに頼んで小学校に送ったのだ。

優也

「ありがとう、レーザーウェーブ。早く二人のところへ行こう」

どうやらドラゴンコンボイとベクターフェニックスに黙って行ってしまったようだ。

レーザーウェーブは速く走らせる。

すると、上空にダージが飛んでいた。

そして、レーザーウェーブに気づく。

ダージ

「あれは・・・・・・レーザーウェーブ？」

次回に続く。

警部〔きれもの〕（後書き）

一難去って、また一難！
果たしてどんな展開になるでしょう？？

浜辺〔とうぼう〕（前書き）

※今回は東北大地震のことを考慮して前書きの一言を無しにします。

浜辺〔とうぼう〕

〔前回の話〕
ベクターフェニックスの活躍によりドラゴンコンボイはなんとか窮地を脱したが、結局叱られる。
ドラゴンコンボイが叱られている間に、優也はレーザーウェーブに頼んで、幼なじみの火鈴を学校に送るのだった。

【道路】

優也とレーザーウェーブは急いでドラゴンコンボイのいる駐車場に戻る。

『やあ、優也』

突然、レーザーウェーブの中に備えているナビゲーションから“セイバーペガサス”の顔が映される。

優也
「あっ、セイバーペガサス！」

セイバーペガサス

「また会ったね」

優也

「うん、今どこにいるの？」

セイバーペガサス

「君の隣だよ」

優也は右側を見る。

そこには、白いサイドカー付きのオートバイが走っていた。

セイバーペガサスだった。

優也

「セイバーペガサスもスキャンしたの？」

セイバーペガサス

「ああっ、直接ではなくデータでスキャンした」

優也

「オートバイなんだね」

セイバーペガサス

「もちろんビーストモードにもなれるよ」

優也

「それで、君に乗っている人は？」

見知らぬ白いドライバーがセイバーペガサスに乗っている。

セイバーペガサス
「これは人間達の目を欺く『ホログラム』だよ」

優也
「ホログラム？」

セイバーペガサス
「誰も乗っていないのに乗り物が動くのは不自然だろ？誰かがちゃんと運転していれば目立たないだろ？」

優也
「確かにそうだね」

セイバーペガサス
「それより、今後のことなんだが・・・」

《ビュウウウウウウウウウウ！！》

「「！？」」

突然の音速に気づき、振り向くと、

「セイバーペガサス！！」

ダージが迫ってくる。

セイバーペガサス
「危ない！」

《キキィー！》

自身を傾けることでダージの特攻をうまく避ける。
ダージはそのまま直線して方向転換する。
そしてセイバーペガサスに向けて、

《ババババババババババ！！》

とバルカン砲を撃つ。

《キキィーッ！ガガガガガガガガガガガガガガ！！》

セイバーペガサスはテクニックとスピードで避け、銃弾は道路に撃ち込まれる。

《キキーッ！ドカン！！》

突然の銃弾に驚いた数台の車は思わず衝突してしまう

セイバーペガサス
「止めろ！関係ない人間たちに危害を加えるな！」
ダージ
「黙れ！お前だけはこの俺が倒す！」

「そうはさせないわ！」

《ビュゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！》

空の向こうから一機の戦闘機が飛んでくる。
それは紅い心神［ＡＴＤ－Ｘ］だった。
セイバーペガサス
「ルビーウィング！」
優也
「えっ、あれルビーウィングなの！？」
ルビーウィング
「いくわよ！」

《ババババババババババババババ！！》

ルビーウィングは向けてバルカン砲を撃つ。

《ヒュン！》

ダージは難なく避け、

《ガガガガガガガガガガガガガガ！！》

道路に銃弾が撃ち込まれる。

《キキーィ！！ドカン！！》

走っていた数台の車は突然の銃弾に驚き衝突してしまう。

優也
「駄目だよルビーウィング！関係ない人間に当たっちゃうよ！」

ルビーウィング
「あっ、そっか！」

セイバーペガサス
「空の上で闘うんだ！」

ルビーウィング
「了解！」

《ビュゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！》

ダージ
「うわっ！？」

ルビーウィング
「こっちに来なさい！相手になってやるわよ！」

ダージを挑発し、ルビーウィングは上空へ高く上がっていく。

ダージ
「このー！（怒）」

怒ったダージはルビーウィングを追いかける。

優也は上空に舞い上がる二機を見上げて心配する。

優也
「大丈夫かな・・・」

セイバーペガサス
「心配ない。彼女もサイバトロンの一員だ。ダージごときに負けやしない」

優也
「あのダージって、セイバーペガサスのことを憎んでいたけど・・・・・・何かしたの？」
セイバーペガサス
「・・・・・・君が気にすることではない」

【上空】

上空にまで飛んだルビーウィングとダージは、

「「トランスフォーム！」」

《ギゴガゴギゴガゴ》

ロボットモードに変形する。

ルビーウィング
「勝負よ！」

両腕（上腕）に装備されている武装からエネルギーの刃が現れる。

ダージ
「舐めるな！」

ダージのライフルが変形し、剣になる。
ライフルの銃身は刃と一体化している。

「ハァァァァァァァァァァァァ！！（ウォォォォォォォォォォォォォォォ！！）」

《ガキィィィィィィン！！》

二人の雄叫びが重なり、二人の刃が強くぶつかる。

「うりゃあ！（てりゃあ！）」

《ガキィン！ガキィン！ガキィン！》

今度は音速に飛行しながら刃を激しく打ち合う。

ダージ
「邪魔はさせるか！」

＊

【セイバートロン星】の激戦区には膨大な炎が燃え盛っていた。
そこには沢山のデストロンのトランスフォーマー達が倒れていた。
その中でかなりの損傷を、左目を破壊されたダージが立ち上がる。
残った右目で見つめいたのは、セイバーペガサスだった。
そして、セイバーペガサスは飛び去っていく。

ダージ
「なぜ・・・・・・なぜなんだ!!」
ダージの叫びが全体的に響いた。

＊

ダージ
「俺は、奴を絶対に倒す!」
ルビーウィング
「その前に、私があんたを倒してやるんだから!」
お互い、譲れぬ想いをぶつけ合うのだった。

【道路】

ルビーウィングとダージが戦っている頃、

セイバーペガサス
「早くドラゴンコンボイのところに行くんだ！」

優也
「わかった！行こう、レーザーウェーブ！」

レーザーウェーブはドラゴンコンボイのところへ向かおうとすると、

「ジャーン！」

ビークルモードのベヒータスが前方に現れる。

《キキィー！ブロロロロロロロロロッ！！》

レーザウェーブとセイバーペガサスは急ブレーキをかけながら逆方向に曲がって走り出す。

ベヒータス
「逃がすか！」

《ブロロロロロロロロロッ！！》

ベヒータスはレーザウェーブとセイバーペガサスを追いかける。

《ドカン！バキン！ボコン！》

レーザーウェーブはセイバーペガサス前方に走る他の車を避けて走るが、ベヒータスは遠慮なく他の車を押し退けながら疾走する。

優也
「いけない、関係ない人達を巻き込んでいる！」

ベヒータス
「狙い定めて！」

ベヒータスは備え付けの機銃を構えて、レーザウェーブを狙う。

セイバーペガサス
「止めろ！優也ごと撃つ気か！？優也を失えば、貴様らの目的が無くなるぞ！」

ベヒータス
「あっ、そっか！」

ベヒータスは構えるのを止める。

優也
「このままじゃ他の人に迷惑がかかる。どこか人目のいない場所に移動しなきゃ！」

優也は考える。

優也
「そうだ！レーザーウェーブ、地図出せる？」

尋ねると、レーザーウェーブはナビゲーションで地図を表示させる。

優也はナビゲーションのカーソルを動かす。

優也
「此処！浜辺っていうところに行って！この時期の平日なら人が滅多に来ないはずだから！」

セイバーペガサス
「わかった！ドラゴンコンボイにもその浜辺とやらに来るように連絡する！」

《ブロロロロロロロッ！！》

レーザーウェーブとセイバーペガサスはスピードを上げて、目的地と定めた『浜辺』に向かう。

もちろん、他の車を避けている。

ベヒータス
「逃がすか！」

ベヒータスは他の車を押し退けながら二人を追う。

【駐車場】

ドラゴンコンボイ
「わかった、すぐに行く！トランスフォーム！」

ベクターフェニックス
「トランスフォーム！」

《ギゴガゴギゴガゴ》

セイバーペガサスから事態を聞いたドラゴンコンボイとベクターフェニックスはビークルモードに変形し、すぐに浜辺に向かう。

【住宅街】

レティシア達を【住宅街】にまで引き付けているギアボルトも事態を聞く。

ギアボルト
「さて、そろそろ・・・」

ギアボルトは急に道を曲がる。

レティシアも曲がると、

レティシア
「なっ！？」

ギアボルトは消えていた。

レティシア
「ど、どこに行ったの！？」

慌てて探すが、見当たらなかった。

＊

レティシア達が探している間にギアボルトは急いで浜辺に向かうのだった。

【上空】

《ガキィン！ガキィン！ガキィン！》

「「このぉぉぉぉぉぉ！！（怒）」」

ルビーウィングとダージはまだぶつかり合っていた。

次回に続く。

浜辺〔とうぼう〕（後書き）

東北の皆さん、元気を取り戻して！

自衛隊やレスキューの皆さん、頑張って下さい！

集合〔はじまり〕（前書き）

……

えーと、『トランスフォーマーエレメントフォースが始まるよ』と
レーザーウェーブが言ってます。

〔通訳：荒神優也〕

集合〔はじまり〕

《前回の話》

突如現れた『デストロン』のダージとベヒータスに襲撃される、『サイバトロン』セイバーペガサスとレーザーウェーブ。

優也の提案で被害の無い浜辺に行くことになる。

そして、ドラゴンコンボイ達も浜辺に向かうのだった。

【浜辺】

浜辺にたどり着いたレーザーウェーブとセイバーペガサスはすぐさま停車する。

優也はレーザーウェーブから降りる。

セイバーペガサス
「トランスフォーム！」

セイバーペガサスは変形を始める。

サイドカーを分離させてオートバイ〔ビークルモード〕ロボットモ

ードに変形する。
分離したサイドカーも翼に変形して、セイバーペガサスと合体する。
これがセイバーペガサスのトランスフォームだった。
レーザーウェーブも改造車〔ビークルモード〕からロボットモードからトランスフォームする。

優也
「カッコいい！」

2人のトランスフォームを見て優也は思わず誉める。

「俺もカッコいいか？」

優也
「えっ？」

追いかけてきたベヒータスがやっと追い付き、呑気に優也に尋ねる。

ベヒータス
「トランスフォーム！」

ベヒータスはビークルモードからロボットモードに変形する。

ベヒータス
「どうだ、カッコいいか？」

優也
「うん、ワイルドでカッコいいかな」

ベヒータス
「ワイルド？」
ここなら『首を傾げる』のだが、ベヒータスは首の部分が無いので、身体全体を傾げる。
優也
「野性的って、意味だよ」
ベヒータス
「野性的……とにかく、カッコいいんだな？」
優也
「う、うん」
ベヒータス
「うっしゃー！」
ベヒータスは跳びながら喜ぶ。
優也
「……ベヒータスって、いつもああなの？」
唖然する優也はレーザーウェーブは頷く。
セイバーペガサス
「隙あり！」
セイバーペガサスは翼を可変させ、羽根を放つ。

セイバーペガサスの武器『ウィングカッター』である。

ベヒータス
「アリャ！？」

ウィングカッターがもろに命中して、ベヒータスは吹き飛ばされる。

優也
「ちょっと、不意討ちは酷いよ」

優也は少し非難する。

セイバーペガサス
「戦闘はもう始まっているんだ。　隙を見せる方が悪い」

セイバーペガサスは悪びれず、当たり前に言う。

「よいしょ！」と言いながら、ベヒータスは起き上がる。

ベヒータス
「へへっ、効かねぇな！」

ベヒータスの身体には傷ひとつ無かった。

ベヒータス
「俺のスキャンした乗り物は耐久性の強い奴でな、その耐久性は俺に受け継がれているぜ！　それだけじゃあねぇ、馬力も受け継がれているぜ！」

ベヒータスはセイバーペガサスに向かって襲い掛かる。

「ふん！」

しかし、セイバーペガサスは余裕でベヒータスの突進を避ける。

「うりゃ！」

セイバーペガサスに向けて、ベヒータスは自分の牙を発射させる。
ベヒータスの武器の『ファングボム』である。

「はっ！」

セイバーペガサスはウィングカッターを放ち、ファングボムを撃ち落とす。

「この！」

再び突進する。

「ふっ」

セイバーペガサスは空へ高く飛ぶ。

ベヒータス
「こら！　降りてきやがれ！」

セイバーペガサスを怒鳴るが、降りてくる訳がなく、ただ跳び跳ねるしかないベヒータスだった。

【上空】

ルビーウィングとダージの闘いはまだ続いていた。

ルビーウィング
「この！」

ダージ
「しつこいぞ！」

ルビーウィングのエネルギー刃とダージの剣が強く重なる。

「「くっ！」」

一旦、離れる2人。

ルビーウィングはエネルギー刃を納め、撃つ構えを取る。

ダージは剣から銃に変形させ、撃つ構えを取る。

ダージ
「一発で仕留めて――」

「やる前に、君から仕留めてやる」

ドラゴンコンボイがダージの後ろにいた。

ルビーウィング
「ドラゴンコンボイ司令官！　やっぱり生きていたんですね！」
ルビーウィングはドラゴンコンボイの生存が確認できてに喜ぶ。
ダージ
「……やはり生きていた」
ドラゴンコンボイ
「ほう、生きていたと信じていたの？　嬉しいね」
ダージ
「少なくともバーストメガトロン様が生きている方を信じているよ」
ドラゴンコンボイ
「……俺もアイツが簡単にくたばるとは思っていないよ。　アイツに会いたいと願っているなら、この場を撤退することをおすすめするよ」
ダージは考える。
自分の今の状況と生き延びることを考えて……、
ダージ
「わかった」
ビークルモードに変形して、この場を飛び去る。
ドラゴンコンボイ

「ルビーウィング、優也のところへ急ご」

ルビーウィング
「了解！」

【浜辺】

ベヒータス
「この、この、この！」

ベヒータスはファングボムでセイバーペガサスを狙い撃とうするが、
なかなか当たらなかった。
そんなときに、

《ベヒータス！》

ダージは通信回線でベヒータスを呼ぶ。

ベヒータス
「おう、ダージか！」

ダージ
《撤退する》

ベヒータス

「ええっ、何でだよ！？」

突然の撤退宣言に怒り出す。

ダージ

《ドラゴンコンボイが生きていた》

ベヒータス

「げっ、マジかよ！？」

頭の悪いベヒータスもドラゴンコンボイの生存には驚くしかなかった。

ダージ

《他にも仲間がいる、撤退しかない》

ベヒータスはセイバーペガサスを見て、悔しがるが、

ベヒータス

「チッ、わかった！」

ビークルモードへ変形して、撤退する。

その様子を見ていた優也はホッとする。

［しばらくして］

地上からギアボルトとベクターフェニックスが、空からドラゴンコンボイとルビーウィングがやって来る。

ギアボルト達はドラゴンコンボイの前に並ぶ。

ドラゴンコンボイ
「全員、トランスフォーム！」

「「「「トランスフォーム！」」」」

サイバトロン全員、トランスフォームする。

優也
「うわーっ！」

優也は思わず感激する。

ドラゴンコンボイ
「君たちに言っておきたいことがある……心配かけてすまなかった」

ベクターフェニックス
「本当、心配させないで下さい」

ギアボルト
「けど、無事だと信じてました」

ルビーウィング
「我々は安心しました」

セイバーペガサス
「無事で何よりです」
レーザーウェーブは頷く。
ドラゴンコンボイ
「皆、ありがとう」
すると、優也がサイバトロン達の前に出る。
優也
「サイバトロンの皆、これからよろしく。　そして、地球へようこそ」
優也はお辞儀すると、サイバトロン達は驚く。
すると、ドラゴンコンボイは優也を掴み、自分の肩に乗せる。
ドラゴンコンボイ
「こちらこそ、よろしくな」
優也
「……うん」
こうして、彼ら（サイバトロン）の、エレメントジュエリーを巡る戦いが始まった。
しかし、そんな様子をじっくり見ていた怪しいレンズが光っていた。

【？？？】

「ふっふっふっ、ドラゴンコンボイにサイバトロンよ。　そう簡単に上手くはいかんぞ」

怪しいレンズを通して映された映像を、謎の頭部だけの存在が見て呟く。

続く。

集合〔はじまり〕（後書き）

擬音無しはいかがですか？感想待ってます。

新たな姿＋登場人物２（前書き）

今回はドラゴンコンボイ達の新しいとビークルモードと登場人物の紹介です。

《百鬼丸さん》からの質問

プロトフォームやスパークや、エネルゴンやマトリックスなどの用語は出てきますか？

話が進むにつれて、出てきます。

質問ありがとうございました。

新たな姿＋登場人物２

《サイバトロン》

・ドラゴンコンボイ
［Ｂ－２スピリット］

・ルビーウィング
［ＡＴＤ－Ｘ心神］

・ギアボルト
［高速パトカー］

・セイバーペガサス
［サイドカー付きオートバイ＋ペガサス］

・レーザーウェーブ
［レーザー砲を装備した大型改造車］

《デストロン》

・スタースクリーム
［Ｆ／Ａ－１８スーパーホーネット］

・ダージ
［Ｆ－２２ラプター］

・ベヒータス
［ストライカー装甲車］

《新しく登場した人間》

レティシア・北郷
イメージＣＶ：中川えりか
［プロフィール］
褐色と銀髪が印象的な警視庁の女性警部。
とても冷静沈着な性格で、外国人ながら日本語をペラペラ喋れるほど知的。優也と火鈴と知り合いなのは……またの機会に書きます。

炎山勝利
イメージＣＶ：星野貴紀
［プロフィール］
優也のクラスを担任にしている教師。
厳しく熱い性格の持ち主で、他の教師や生徒達に信頼されている。
だが、いつも厳しく叱られている優也だけは苦手としている人物。

荒神優造
イメージＣＶ：梁田清之
［プロフィール］

優也の祖父で、元は研究者であり、会社の社長をしていたが、現在は義理の息子である賢人に社長の座を譲って、隠居している。厳しくしつつ孫の優也を大事に思っている。

市原秋子
イメージＣＶ：大浦冬華
［プロフィール］
荒神家の家政婦。荒神家の家事全般を担当している。父親に厳しく叱られる優也を優しく見守り、そっと諭してあげている。
優也も優しいおばあちゃんだと思っている。

以上。

新たな姿＋登場人物２（後書き）

ビークルモードの兵器類は、『最強バイブル』という本を参考にしました。

基地（しんきょ）（前書き）

よっ、俺はベヒータス。“百鬼丸”さんからの質問を読むぜ。

【アニメシリーズのトランスフォーマーで、烈火竜さんにとって、1番好きなのはどういうのですか？】

答えは、アドリブ満載の『ビーストウォーズ』じゃん（チータス風に）

そんじゃ、『トランスフォーマーエレメントフォース』始まるぜ！

基地（しんきょ）

月の裏側に一隻の紫色の宇宙戦艦が停泊していた。

その宇宙戦艦には、『デストロン』のエンブレムが貼られてあった。

この宇宙戦艦は、デストロン軍要塞戦艦〈ギャザー〉である。

【ギャザー艦内】

スタースクリーム、ダージ、ベヒータス、コラーダの『デストロン』のトランスフォーマーが揃っていた。

「なるほど、他のサイバトロン達もやって来たか」

「そうなんだよ、グッヘヘヘ〜！」

「って、笑ってる場合かよ」

呑気に報告するベヒータスに呆れるコラーダ。

ベヒータスの隣にいるダージは苛立っていた。

そんなダージに気付いたコラーダは離れる。

しかし、ベヒータスは気付いてなかった。
「……苛立ってますね、ダージの奴」
「……セイバーペガサスを倒すどころか、闘えなかったからな」
スタースクリームはダージの気持ちを察していた。
「……ダージ、気持ちを切り替えてくれないか？」
「あ、すみません」
ダージは言われる通りに気持ちを切り替える。
そして、会議が始まる。
「さて、諸君。『エレメントジュエリー』を探す為に必要な、“荒神優也”は‘サイバトロン’の手にある。我々の今後の行動は、何をすれば良いと思う？」
スタースクリームの問いかけで考え始める‘デストロン’の面々。
「やっぱ、‘サイバトロン’どもを倒して、あの“優也”を奪う！」
という提案を挙げる。
「簡単に言うけど、それはかなり大変だよ」
スタースクリームはベヒータスをたしなめる。
「……奴らが『エレメントジュエリー』を見つけた時に、横取りす

るってのは？」
「良い考えだ」
コラーダの提案に賛成するスタースクリーム。
「しかし、どうやって横取りするんだ？」
ダージは方法を問い掛ける。
「そりゃ、奴らが出撃した時に後をつけるんだよ」
「その出撃はわかるか？」
「そりゃ……」
コラーダはそこまでは考えていなかった。
「わかりますよ」
コラーダの代わりにスタースクリームが答える。
「あの地球の周りに、『感知スキャナー』を備えた衛星を数台漂わせるんです」
「感知センサー？」
「トランスフォーマーを感知させるセンサーです」
「あったんだ」

「我々はいつもサイバトロンを倒す為の兵器を開発していましたが、今回は『エレメントジュエリー』を探す為に開発したのです」

ベヒータスは頭を捻る。

『エレメントジュエリー』と、サイバトロン、を見つけるの、なんの関係があるのかと。

「なるほど」

ダージだけは納得する。

「どういう事？」

「早速やりましょう」

ベヒータスの問い掛けを聞かず、作業に取りかかる。

「どういう事だよ？」

ギャザーのハッチが開き、『感知センサー』を搭載された衛星、数機が発射され、地球に向かう。

その様子をスタースクリーム達は見送る。

「さて、出撃準備をしましょう」

＊

優也は通学路を歩いていると、

「優也」

ギアボルト〔ビークルモード〕は後ろから優也を呼び止める。

「あっ、ギアボルト！」

優也はギアボルトの元へ駆け寄る。

「どうしたの？」

「俺達の基地に招待しに来たんだ」

「基地？」

「地球にいる滞在する間にいる場所だよ」

優也は『場所』と聞いて考える。

「……まさか、また駐車場じゃないよね？」

ドラゴンコンボイの失敗を思い出し、不安げに尋ねる。

「いやいや、そんなわけないだろ。　あと、もうその事をあんまり

弄らないでやってくれ。　本人も反省しているから」

ギアボルトは苦笑する。

「それじゃ、何処なの？」

「それを案内しに来たんだ。　さっ、乗って」

ドアを開けて、不安ながら優也を乗せる。

優也を乗せたギアボルトは高速道路を走る。

「基地って、何処にあるの？」

「着けばわかるよ」

そう言うと、ギアボルトは脇道へ行く。

どんどん下がって行くと、目の前に、突如ゲートが現れて、次元の入り口を作り出す。

「あれは？」

「ワープゲートだよ」

ギアボルトは入り口に入る。

＊

次元の入り口の輝きで目を瞑る優也。

「着いたぜ」

ギアボルトの言葉で、優也は目を開ける。

「うわっ！？」

なんと、そこは浜辺とジャングルに包まれた孤島だった。

「此処って……」

「人間のいない、孤島だよ」

「此処に基地を建てたの？」

「いや、正確には駐在させてもらっているんだ」

「駐在？」

優也は首を傾げる。

「まあ、見ればわかるよ。　案内するから降りて」

優也は言われた通りに降り、ギアボルトはロボットモードへ変形

する。

そして、ギアボルトは優也を連れてジャングルの中へ入って行く。

「暑いね」

厚着を着ていた優也には、ジャングルの中は暑い。

「着いたぜ」

たどり着いた優也は驚愕した。

なんと、目の前に蒼く長い船体が特徴的の巨大な宇宙船があったのだ。

「我がサイバトロン最新型の宇宙船〈ドルフィン〉だよ」

「と、とても大きい！」

「優也のような人間から見ればそうなるな。　ギアボルト、戻りました」

ギアボルトは通信回線で報告すると、ドルフィンのハッチが開く。

「さっ、入った入った」

「うん」

優也とギアボルトはドルフィンに入る。

通路を歩くたびに、大きな船内を優也はキョロキョロと見渡す。

「中も凄いね」

「ようこそ、優也」

「ドラゴンコンボイ！」

ドラゴンコンボイが出迎えてくれる。

「驚いたか？」

「うん、ドラゴンコンボイが駐車場で停まっていたより驚いた」

「わ、忘れてくれ……」

ドラゴンコンボイは苦笑いする。

「それより、見せたいところがあるんだ。　来てくれ」

ドラゴンコンボイは優也を，見せたいところ，へ案内する。

「うわーっ！」

優也は驚いた。

‘見せたいところ’とは、指令室であり操舵室でもあった。

大きな液晶画面に、大きなコンピューター等があった。

そこには、ベクターフェニックス、ルビーウィング、セイバーペガサス、レーザーウェーブがいた。

「よく来てくれた、優也」

「あっ、ベクターフェニックス」

優也はベクターフェニックスの元へ駆け寄る。

「凄い宇宙船だね」

「ああっ、私も驚いている。　それより、君を呼んだのは、この宇宙船を見せるだけではない。　君の初仕事がきたのだ」

「僕の初仕事？」

優也は驚き、自分の使命を思い出す。

「腕を、腕輪を見せてくれ」

ベクターフェニックスの言われた通りに、優也は紋章のある腕を捲って見せる。

「‘腕輪を出ろ’と念じてみろ」

「うん」

優也が念じると、紋章から腕輪に変わる。

「凄い！」

「次に腕輪を掲げてくれ。　そうすれば、エレメントジュエリーのどれかが目覚めるはずだ」

「わかった」

優也は腕輪を掲げる。

ドラゴンコンボイ達は、優也を見守る。

そして、腕輪の一部が赤くに輝き出す。

「おおっ、その輝きは‘フレイムルビー’だ！」

「フレイムルビー？」

「《情熱》を司るルビーだ」

「レーザーウェーブ、検索を」

ドラゴンコンボイの指示でレーザーウェーブはコンピューターを動かす。

「わかるの？」

「ベクターフェニックスの指示のもと、レーザーウェーブはエレメントジュエリーの反応を察知できるシステムを開発したんだ」

「ただし、目覚めているのだけな」

レーザーウェーブの検索が終わると、液晶画面に世界地図が映し出される。

そして、あるポイントを指す。

「よし、出動だ！」

「「「了解！！」」」

遂にサイバトロンが動き出した。

次回に続く。

基地（しんきょ）（後書き）

ここからが仕事だと思って書きます！

火山〔はっけん〕（前書き）

よう、コラーダ様だ！
俺は隠れると潜入が得意だぜ！
スパイみたいでカッコいいだろ？
そんじゃ、トランスフォーマーエレメントフォース始まるぜ！

〔コラーダ〕

火山〔はっけん〕

サイバトロンの母艦〔ドルフィン〕内で、ドラゴンコンボイ率いるサイバトロン達は、ある場所に集まっていた。

そこは、地球上の何処にでも転送できるワープゲートのある大型の部屋である。

このワープゲートを利用して、目的地へ出動するのだ。

ドラゴンコンボイと共に初出動するのは、ベクターフェニックス、ギアボルト、ルビーウィング。

そして、優也である。

セイバーペガサスとレーザーウェーブは留守番である。

ドラゴンコンボイ達は出撃する準備を終える。

「トランスフォーム！」

一斉にビークルモードにトランスフォームするドラゴンコンボイ達。

優也はドラゴンコンボイに乗り込む。

『それでは、ワープゲートを開きます』

セイバーペガサスのアナウンスをすると、ワープゲートに次元の

入り口が生じる。

「それでは、出撃だ！」

「「「了解！」」」

ドラゴンコンボイは先頭にギアボルト達は次元の入り口に飛び込んでいく。

「お気をつけて」

セイバーペガサスは言葉をかける。

一方、月の裏側にあるデストロンの母艦〔ギャザー〕内では……。

「スタースクリーム様！　反応しましたぜ！」

地球の周りへ飛ばした衛星の反応を待っていたコラーダは、すぐにスタースクリームに知らせる。

「それでは、行きましょうか」

スタースクリーム達は、早速、反応のあった場所へと出撃するのだった。

優也とサイバトロン達が着いたところは、煙を吹く火山のある地帯であった。

「うわー」

ドラゴンコンボイから降りた優也は、初めて見る火山を見て感激する。

ドラゴンコンボイ達はロボットモードへ変形する。

「優也、腕輪をかざしてみてくれ」

ベクターフェニックスの指示通りに優也は腕輪をかざすと、腕輪は一本の赤き光線を放つ。

放った先は、煙を吐く火山だった。

「なるほど、‘フレイムルビー’は、火山にあるのか」

ベクターフェニックスはそう推測する。

「……まさか、マグマの中にあるんじゃないよね？……」

優也は恐る恐る訊ねる。

「恐らくな」

ベクターフェニックスはきっぱりと答える。

「『恐らくな』って、どうやって取るの！？　いくらトランスフォーマーでも、マグマに焼かれて溶かされるよ！　もちろん、人間である僕もだよ！」

慌てて、『マグマ』の説明する優也。

「あっはっはっはっ、わかっている。　君にそんな危険なことはさせないよ」

ドラゴンコンボイはあるものを取り出し、優也に手渡す。

それは円型の機械が取り付けたベルトだった。

「これは？」

「レーザーウェーブが作ってくれた特殊なベルトだよ。　これを付けて、調整すればあらゆる環境に適用できる」

優也はベルトを受け取る。

「つまり、マグマの中でも暑くならないの？」

「その通りだ」

「あと、腕輪をかざすだけでエレメントジュエリーは現れてくれる。だから、取りに行く必要は無い」

「なんだ、良かった」

２人の説明を聞き、優也が安心する。

すると、上空に次元の入り口が開く。
ドラゴンコンボイはいち早く気付く。
入り口からビークルモードのスタースクリームとダージとベヒータスが飛び出てくる。
「デストロン！」
ギアボルト達は戦闘体勢に入る。
「ルビーウィング、優也を連れて火山に行くんだ！」
「りょ、了解！」
すぐさまビークルモードに変形するルビーウィング。
「我々が奴等を食い止める。　その間にフレイムルビーを！」
「優也乗って！」
「わかった。　ドラゴンコンボイ、気をつけて」
優也は急いでルビーウィングに乗り込む。
「トランスフォーム！」
ドラゴンコンボイもビークルモードに変形する。

「同時に飛ぶぞ！」
「了解！　優也はしっかり私に掴まってて」
「うん！」
優也はコックピット内でベルトを付けて、しっかりレバーを掴む。
「早速見つけ――」
「発射！」
スタースクリームが言い終わる前に、ドラゴンコンボイとルビーウィングは同時に飛び立つ。
「何！？」
スタースクリームは驚くと、ドラゴンコンボイが向かっていきぶつかる。
「ぐわっ！」
スタースクリームはバランスを崩してしまう。
「スタースクリ――」
ダージも言い終わる前に、ビームで狙撃されそうになる。
地上から、ロボットモードのギアボルトがギアライフルで狙撃していた。

「お前の相手は俺だ！」

「くっ、トランスフォーム！」

ダージもすぐさまロボットモードに変形し、ダージライフルを撃って応戦する。

「あらよっと！」

ベヒータスは難なく着地すると、目の前にフェニックスソードを構えたベクターフェニックスが立っていた。

「お前の相手は私だ！」

「おう、いいぜ、おばちゃん！」

「おば！？」

ベヒータスのベクターフェニックスはショックを受ける。

因みにベヒータスには悪意が無い。

「誰がおばちゃんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

フェニックスソードの刀身が燃え上がる。

「ヒィィィィィィィィィィィィ！？」

怒りに我を忘れたベクターフェニックスは燃え盛るフェニックスソードを振り回しながら、ベヒータスを追いかける。

かつて無い恐怖にベヒータスは逃げるしかなかった。

「くっ、トランスフォーム！」

バランスを取り戻したスタースクリームはすぐにロボットモードに変形すると、目の前でドラゴンコンボイもロボットモードに変形する。

「どこで嗅ぎ付けたか、わからないが、お前達にエレメントジュエリーは渡さん」

そう言って、ドラゴンアックスを構える。

「ふっ、ナルキャノン！」

ドラゴンコンボイに向けて、ナルキャノンを撃つ。

「何の！」

ドラゴンアックスでナルキャノンを一刀両断にする。

「いくぞ！」

「ふん！」

スタースクリームは腕のビームマシンガンを刃に変形させる。

ビームマシンガンは、接近戦にも対応できる武器である。

ドラゴンコンボイはそんなスタースクリームに立ち向かう。

そんな激闘を繰り広げている間に、ルビーウィングは一気に火山を目指して飛ぶ。

「どうやって入るの？」

「優也、降りたらすぐにベルトのスイッチを押してね」

ルビーウィングがそういうと、あっという間に火山の頂上に着く。

優也は降りてすぐにベルトのスイッチを押す。

ルビーウィングはロボットモードに変形し、優也に手を差しのべる。

「私の手に乗って、掴まって」

「わかった」

優也は言われた通りにルビーウィングの手に乗って、指に掴まる。

「行くわよ！」

ルビーウィングは火口に飛び込む。

「うわぁぁぁぁぁぁ……って、暑くないや」
火口の中に降りているにも関わらず、暑くならないことに気付く優也。
「本当に凄いベルトだ」
「そろそろ着くわよ」
ルビーウィングは降りた場所は、崖の下にマグマがあるところだった。
ルビーウィングから降りた優也はこっそりと下のマグマを見る。
「暑くないけど、やっぱり凄い迫力だ。　あと臭いや」
優也は初めて見るマグマに怖がり、火山ガスを臭がる。
「優也、落ちたら、危ないよ」
「あっ、はい！」
「ベクターフェニックスの言った通りにやってみて」
「うん」
優也は腕輪をマグマに向けてかざすと、再び赤き光線を放つ。
すると、マグマは輝き、中から宝石が飛び出てくる。

エレメントジュエリーの一つ，フレイムルビー，である。

「これが、フレイムルビーか」

優也が見とれていると、次元の入り口が現れ、コラーダが出てくる。

2人はコラーダが突然現れたことに驚愕。

「いただき！」

コラーダはテイルウイップでフレイムルビーを掴む。

「……アチッ！？」

フレイムルビーがあまりに熱かったらしく、コラーダは火傷を負ってしまう。

2人はコラーダを見て、唖然する。

「優也、今のうちに回収」

「う、うん」

優也は腕輪をフレイムルビーに向けると、赤き光線が放たれる。

赤き光線に当たったフレイムルビーは小さくなって、腕輪に吸い込まれると、腕輪に赤いルビーが浮き現れる。

「これで回収かな？」
「もちろんよ！」
ルビーウィングはＯＫのサインを見せる。
「やったぁぁぁぁぁぁ！！」
優也は回収成功に喜ぶ。
「ところで……コラーダは何で？」
コラーダは火傷したテイルウイップを吹きかけていた。
「そうよ。　あんたが隠れていると思って、あんたが追い付けないほどのスピードでここ［火山］に着いたのに」
悔しがるルビーウィング。
「そ、そりゃ、簡単だ。　戦線離脱したお前らを監視したんだ。エレメントジュエリーを見つけたと考えてな。　その考えは当たったから、見つけたところで横取りする筈だったが……」
「予想しなかった熱さに火傷したんだね」
「そ、そうだよ」
コラーダは落ち込む。
「落ち込んでいるところ悪いんだけど、フレイムルビーは回収した

よ」

コラーダに腕輪を見せる。

「なら、お前ごと回収してやる」

テイルウイップで優也を捕まえようとする。

「残念でした」

ルビーウィングは優也を抱き上げる。

「とりゃあ！」

「うぎゃ！」

ルビーウィングはコラーダを蹴り飛ばし、高く飛んでいく。

「今日の俺って……最悪……」

壁に埋もれながら嘆くコラーダだった。

「「はっ！」」

ドラゴンコンボイとスタースクリームが互いの武器で戦う。

「ドラゴンコンボイ！　フレイムルビーを回収したよ！」

ルビーウィングに抱かれた優也は大きな声でドラゴンコンボイに伝える。

「どうやらそちらの負けのようです」

スタースクリームは身を引く。

「ずいぶんあっさり退くんだな」

「今回は小手調べですよ。　次は負けません」

そう言って、スタースクリームは退却する。

「ダージ、助けて！」

ベヒータスはベクターフェニックスにまだ追いかけられていた。

「しょうがないな」

ダージはベヒータスを掴んで飛び去る。

「ちっ、逃がしたか」

ベクターフェニックスは心底悔しがる。

優也が腕輪をかざすと、フレイムルビーが現れる。

「これがフレイムルビーか」

サイバトロン一同はフレイムルビーを見る。

「優也、よくやった」

「うん」

初のエレメントジュエリー争奪戦はサイバトロンの勝利に終わりました。

終わり

火山〔はっけん〕（後書き）

なかなか思い付きませんでしたが書けました。

生存〔あんやく〕（前書き）

諸君、久しぶりじゃな。
えっ、誰だって？　それは読んでからのお楽しみ。
では、【トランスフォーマーエレメントフォース】始まりじゃ！

〔？？？〕

生存〔あんやく〕

サイバトロンと優也はフレイムルビーを回収できたことを喜ぶ。

上空から、その様子を監視する小型メカ浮かんでいた。

＊

「そうか、手に入れたのか」

小型メカのカメラを通し、不敵に笑う頭部。

その正体は、バーストメガトロンだった。

「流石はドラゴンコンボイ。　スタースクリームも考えて退却したな」

ドラゴンコンボイとスタースクリームの闘いを冷静に分析して、感想をのべる。

「それより」

画面モニターで優也を拡大する。

「……“優華”に似ておるな」

呟いた後、女性の立体映像が現れる。

その女性は優也に酷似し、バーストメガトロンはじっくり眺める。

「いかんいかん、情に流されてはいかんな。　気晴らしに、読者「ユーザー」の質問に答えてやろ」

映像を消して、何故か質問コーナーを始めてしまう。

※それは、前書きに書くのは大変だからである。

ペンネーム：百鬼丸くん

『質問ですが、この物語には、ジョイントロンのトリプルダプスや、ビルドロンのデバスターなどの、合体戦士や合体兵士は出てきますか？』

「作者の話では……そこまでは考えていないらしい。　出るか出ないかは物語の進み具合によるな。　わかったか？」

ペンネーム：脇役くん

『質問１

新たなトランスフォーマーが出て来ますか？

質問２

デストロン軍団の中で忠実な部下はいますか？

質問３

バーストメガトロンが復活の時はガルバトロンなるんですか？』

「１の答え、出そうかと思っている。

２の答え、スタースクリームは野心家だから駄目。　ベヒータスは馬鹿。　コラーダの忠誠心は薄い。　ということは、ダージだな

３の答え、復活しても、わしはバーストメガトロンだ

納得したか？」

ペンネーム：バンブル

『質問

もし、トランスフォーマーエレメントフォース英語版の時、なんて名前を付ける？

（ドラゴンコンボイ（オプティマス・プライム）、メガトロン、スタースクリーム）』

「英語版なんてモノは作らん。　作者は英語は苦手だ」

ペンネーム：スパイク

『質問です！

トランスフォーマーエレメントフォースて、お約束の作画ミスとかありますか？』

「って、小説に作画ミス等はない！　あるのは誤字脱字である」

※以上、質問回答終わり。

「さて、サイバトロンどもにエレメントジュエリーを奪われるのはシャクだ。　どうしたものかのう」

バーストメガトロンが考えていると、部屋にある人物が入って来る。

それは、優也の祖父の“荒神優造”だった。

※何故、優也のおじいちゃんが来たのかは別の機会で話そう。

「優造よ、どうした？」

「実は相談があるのだ」

優造の深刻そうな顔を見て、真剣な悩みだと感じる。

「相談とは何だ？」

「孫の誕生日プレゼントのことだ」

「誕生日プレゼント？」

バーストメガトロンは首を傾げる。

「優也の成績はなかなか上がっていない。　だから、勉学に役立つ

モノをプレゼントしようと考えておる。　しかし、せっかくの誕生日だから、あの子が喜ぶ楽しいモノをプレゼントした方が良いとも考えておる。　勉学に役立つモノにするか、楽しいモノにするか、悩んでおるのじゃ」

バーストメガトロンは、優造の優也に対する思いやりを知り、本当に孫思いだなと感心した。

「……わかった。　ならば、勉学しながら楽しくするモノをプレゼントすれば良い」

「勉学しながら楽しくするモノ？」

バーストメガトロンの発案に、首を傾げてしまう優造。

「ふっふっふっ、一緒にやればわかる」

バーストメガトロンは不敵に笑い出す。

果たして、バーストメガトロンが思い付いた優也の誕生日プレゼントとはいったい？

次回に続く。

生存〔あんやく〕（後書き）

今度から質問は厳選して選びますね。

腕輪［こころえ］（前書き）

こんばんわ、‘ヒロイン’のベクターフェニックスだ。
質問を読み上げる。

ペンネーム：脇役殿から質問、『ドラゴンコンボイはマスクを付けているの？付けてないの？』か。答えは……付けているだ。

では【トランスフォーマーエレメントフォース】の始まりだ！
〔ベクターフェニックス〕

腕輪［こころえ］

事は、優也の学校から始まった。

「荒神、いったいどういうつもりだ」

「……ごめんなさい」

職員室で優也は炎山に説教されていた。

「最近は遅刻はするわ、居眠りをするわで、たるんでいるぞ」

「はい」

優也は申し訳なく謝った。

「夜遅くに何をしているんだ？」

優也は冷や汗をかきながら考えた。

「……勉強です……」

「居眠りしたら意味が無いぞ」

「うっ」

指摘された優也は黙り込んでしまった。

「本当は何をやってんだ？」

優也は困ってしまい、黙り込んでしまう。

「……まぁ、良いだろ。　言えないなら言わなくて良い」

炎山はため息ついて、問いただすのを辞めた。

「だが、授業はちゃんと受けろ」

「はい」

気を落とした優也は職員室を退室した。

「……はぁー、大人しすぎる生徒は扱いに難いな」

優也の扱い方に悩ます炎山だった。

＊

「ふぁ～……」

まだ眠そうな優也は廊下を歩く。

「……まだ眠いな……」

実は、優也の寝不足には、ある理由があったのだ。

＊

それは数週間前、夜中にベクターフェニックスに呼び出され、ドルフィンにやって来た優也。

「特訓？」

「そうだ」

ベクターフェニックスは優也に特訓を言い渡した。

「優也は‘エレメントジュエリー’を納めることができる。だから、デストロンに一番に狙われてしまう」

「うん」

「デストロンから逃げれる為に、特訓をするのだ」

優也は‘特訓’と聞いて、嫌な予感を感じていた。

「特訓の内容は……腕輪の使いこなすことだ！」

「腕輪を使いこなす！？」

意外な特訓だと、優也は驚いた。
「腕輪はジュエリーを納めるだけではなく、ジュエリーの聖なる力をも操れることも可能なのだ」
「そうなんだ」
優也は表せた腕輪を見つめる。
「ただし、それを操るには強い意識と制する力が必要なのだ」
「強い意識と制する力？」
「試しにやってみよう。　想いを込めるように腕輪を見つめて」
優也は腕輪をじっと見つめる。
「『輝き出せ』と念じるのだ」
うーんと唸って、腕輪に目掛けて。
「輝き出せ！」
と言うと、腕輪は強く輝き出した。
「うわっ！？」
あまりに眩しすぎるので、思わず目を閉じてしまう優也。
目を閉じた瞬間、輝きは消えた。

「大丈夫か？」

「う、うん。　これはいったい？」

「それは、シャイニングダイヤモンド，の光の力だ」

「光の力？」

「ダイヤモンドの言葉は『純粋』、『平和』などの光と関係している。　だから輝かせたり、光で導くすることができる」

「ふーん」

「この前手に入れた、フレイムルビー，のルビーは『情熱』、『勇気』などの火を関係している。　だから、己に火をまとわせたり、火を放ったりできるのだ」

「あっ、確かに関係しているね」

優也は名前の由来や意味に納得した。

「今、優也が使えるのは、光の力だ。　優也には『純粋』を持っているからな」

「そ、そうかな」

優也はベクターフェニックスに『純粋』と言われて照れてしまう。

「輝かせたのが、その証拠だ」

「輝かせたのは良かったけど、眩しすぎだよ」
「強く念じしすぎたのだ。　まずはその力を操れるように特訓するのだ」
「具体的に何をするの？」
すると、ベクターフェニックスはニヤリと笑った。
これを見た優也は嫌な予感がした。
こうして特訓が始まった。
ある時、
「へぅ～……」
「もっと早くペダルをますのだ！」
優也は必死に自転車のペダルを漕いで、自家発電をしていた。
「これは何のため？」
「光を知るために光を生み出すためだ。　はい、喋らない」
「はい！」
優也は慌ててペダルを漕いだ。
ちなみに、貯めた電気は船内に使われるらしい。
またある時は、

「もっと力を込めて磨け」

優也は錆び付いた物を鑢で必死に磨いていた。

「これは輝かせるための特訓だ！」

「……はい！」

優也は一生懸命に磨いた。

ちなみに、錆び付いたものは、島に漂流してきたものである。

またまたある時は、

「……難しい」

光に関する理科の本を読んでいた。

勉強の苦手な優也には、これが一番苦手なので、苦労した。

そんな優也をドラゴンコンボイとレーザーウェーブは心配で見守っていた。

「優也は大丈夫かな」

＊

「宇宙の平和を守る前に、僕が倒れちゃうかも」

毎朝、毎晩、休みの日とこの特訓を繰り返しなので、優也は寝不足と疲労が溜まっていたのだ。

「おい、荒神」

優也の前に、同級生達が待ち構えていた。

「な、何？」

「明日のお前の誕生会はちゃんとごちそうを用意しろよ」

これを聞いた優也は、もうすぐ自分の誕生日を思い出した。

「う、うん」

「つまんないゲームを用意すんなよ」

「良い賞品を用意しなよ」

「私達に恥をかかせないでよ」

同級生達は別に優也を祝うつもりはなく、ごちそうやゲームの賞品が目当てであった。

「じゃあな」

同級生達は去っていく。

「……今年もやるのか、つまんない誕生会」
優也はあまり楽しみにしていなかった。

＊

優造とバーストメガトロンはあるものを開発に勤しんでいた。
「よし、完成だ」
あるものの最終段階を終えた。
それは、コンピューター画面に、可愛らしいイルカが映っていた。
「お勉強ソフト，ゲルくん，の完成だ」
「名前は可愛くないが、問題はこれの効果だ」
「我らで作り上げたのだ、問題は無いはずだ」
とバーストメガトロンは不適に笑った。
次回に続く。

腕輪［こころえ］（後書き）

急いで書きました。
満足しましたか？

海豚〔いっわり〕（前書き）

海豚を，いるか，と読みます。

海豚〔いっわり〕

サイバトロン基地‘ドルフィン’の開発室。
レーザーウェーブが道具を使って、あるものを製作していた。
片腕がレーザー砲なのに、細かいものである。

さて、他のサイバトロン達はブリッジにいた。
「誕生日？」
ギアボルトがセイバーペガサスから誕生日と聞かされる。
「……誕生日って、なんだ？……」
しかし、ギアボルトは知らないようだ。
ドラゴンコンボイ達も知らないので、首を傾げた。
「調べたところ、生まれた日のことらしい。生まれたとは、トランスフォーマーでいう‘組み立てられた’という意味だ」
セイバーペガサスは分かりやすく説明した。
セイバーペガサスは地球の用語や知識をあらかじめに調べているのである。
「へぇ～、そうか……」
「んで、優也はその誕生日で何をするんだ？」
ドラゴンコンボイは不意に訊ねた。
「お祝いをするらしいですよ。美味しいものを食べたり、ゲームをしたり、プレゼントを貰ったりして」
「おっ、楽しそうだな」
「いいなあ、地球人って」
「今度、誰かの組み立てられた日に、誕生日をやってみようか？」
「それ、良いわね！」
誕生日の内容を聞かされたドラゴンコンボイ達は興味を示した。
おほん、とわざとらしく咳払いしたベクターフェニックス。
「我々は遊びに来たのではないのです。そのようなお遊びに関心を

持つのは、如何かと思います」
　真面目なベクターフェニックスは浮かれるドラゴンコンボイ達に釘を指す。
「固いことを言うなよ」
「そうよ、そうよ」
　ギアボルトとルビーウィングは怒るように不満を漏らす。
「我々はエレメントジュエリーを集めるという大事な使命があるのだ。それを忘れるなと言いたいのだ」
　ベクターフェニックスは使命の大事さを語る。
「別に忘れていないさ」
　ドラゴンコンボイは、ベクターフェニックスをたしなめる。
「なら、浮かれない！」
「いや、地球の文化を知る必要はあるんじゃないのかな？　君だって、知らないのだろ？」
「う、それは……」
　確かに知らないので、知る必要がある。これにベクターフェニックスは言葉に詰まる。
「そんなに、難しい顔をすると、せっかくの可愛い顔が台無しだぞ」
「えっ！」とベクターフェニックスは顔を真っ赤に染めてしまう。
――か、可愛い顔……。彼はそう思うのか！
　ドラゴンコンボイの言葉に、ベクターフェニックスは乙女心が揺らいだ。
「……本当にそう思うのか？……」
　恐る恐るとドラゴンコンボイに訊ねてみる。

「俺らも、優也の誕生日祝いをしようか？」
「良いですね！」
「この前の初出撃の祝いを兼ねましょう！」
　と盛り上がっていた。

「って、無視するな！」
無視されたベクターフェニックスは怒鳴った。
「止めましょう、そんなこと」
セイバーペガサスは反対した。
「セイバーペガサス、お前まで固いことを言うなよ」
「やろうにも、何をどうすれば良いのかわからないでしょう？　それに、優也は優也の家でやる筈ですので、必要ありません」
「う、うーん……」
セイバーペガサスは正論でドラゴンコンボイ達を納得させた。
「ベクターフェニックスもそう思う――」
「知るか！」
激怒していたベクターフェニックスは怒鳴った後、ずんずんと立ち去る。
「な、何を怒ってるんだ？」
原因であるドラゴンコンボイは首を傾げるのだった。
一部始終を見たレーザーウェーブはあることを考えた。
先ほど作っていたもののことを。

＊

一方、優也の家ではセイバーペガサスの言う通り誕生日パーティーが開かれていた。
「皆、来てくれてありが――」
「これ、美味いな！」
「このゲーム、面白いな！」
「やれやれ！」
子供達は、本日の主役である優也をそっちのけで、ごちそうを食べたり、ゲームをしたりしていた。

取り残された優也は愕然していた。
「……去年と同じだな……」
優也は諦めてため息を漏らす。
「こら、優也！　今日の主役はお前だ。しっかりしてどんと胸を張れ」
優造が優也をせかす。
「うん、わかった」
優也は強気になって、主役であることを主張しようと決意した。
「皆、今日の主役は――」
「うるさい！」
と一喝される。
「ごめんなさい」
優也は思わず謝る。
優造は優也の情けなさに落胆する。
優也は皆からプレゼントをもらった。
プレゼントは男子からはバースデーカードだった。しかも『誕生日おめでとう』だけだった。
女子からは折り紙で作った花一本だった。
明らかな手抜きだった。
「……気持ちが大事だから……」
優也は自分にそう言い聞かせる。
優造も哀れに思った。
「……せめて、火鈴ちゃんがいたらな……」
この場にいない火鈴がいてほしかったと思った。

＊

さて、火鈴ちゃんとはいうと……。
「カルビ一品追加！」

「あいよ！」
忙しくお店の手伝いをしていた。
火鈴の実家は焼肉屋である。
ちなみに店名は【鉄火】である。
「火鈴悪いな、手伝いをさせて」
店主であり火鈴の父、『鬼塚鉄二』が謝る。
『鬼塚』が火鈴の名字である。
「いいよ、お店が忙しいんだから」
とカルビを運ぶ。
「今日は優ちゃんの誕生日じゃないネ？」
火鈴の母、『鈴華』が訊ねる。
ちなみに、鈴華は中国人です。
「えっ、何だって？」
火鈴は笑顔ながら怖い威圧感を漂わせていた。
「……怒ってるネ……」
「……優坊（優也）がプレゼントをくれなかったことを根に持ってんな……」
とひそひそ話をする。
どうやら優也は火鈴にプレゼントをあげなかったので、苛ついていた。
なので、あえて欠席したのだ。
「いらっしゃいませ」
気持ちを切り換えてお客様の応対をする火鈴だった。

＊

しばらくして、友達は帰っていた。
「やれやれ、食べるだけ食べて、遊ぶだけ遊びましたね」
秋子は愚痴を溢しながら後片付けをした。
「う、うん」

優也は自分の不甲斐なさに落ち込む。
そんな優也に優造はあるものを渡す。
それは素敵な包みだった。
「誕生日プレゼントだ」
「わっ、ありがとう。開けて良い」
「もちろんだ」　優也は開けてみると、ソフトウェアだった。
「パソコンで起動しなさい」
「うん」
優也は嬉しく思う。

＊

部屋に戻った優也は起動させたパソコンにソフトウェアを入れた。
パソコンの画面にイルカが現れた。
《こんばんわ、僕はイルカのゲルだよ。今日から君のお勉強は僕が見るよ！》
「勉強！？」
《大丈夫だよ。ゲーム感覚で教えるから》
「う、うん」
優也は頷く。
（凄いな。まるで本当に話をしているみたい）
優也はソフトウェアの高性能に驚く。

＊

バーストメガトロンは大画面で、優也の顔を観ていた。
それは、優也のパソコンを通じていたからだ。
「上手くやるのだぞ、ゲルくん――いや、ゲルシャーク」
と不敵に笑う。
バーストメガトロンの策略が始まった。

次回に続く

海豚〔いっわり〕（後書き）

果たして優也はどうなる！？

蒼鮫〔ほんしょう〕（前書き）

大変遅くなってすみませんでした。

蒼鮫〔ほんしょう〕

荒神家の静かな夜で……、
「なるほど」
と優也はパソコン越しからゲルくんから勉強を教わっていた。
苦手な勉強が上達していた。なぜかと言うと、それは誕生日の後日まで遡る。
その日、ゲルくんから教わったのは『簡単な算数』だった。まずは基礎を理解させるというやり方である。
最初は渋っていた優也だったが、段々と理解しながら楽しくなっていた。算数だけではなく、国語や社会等も同じ方法でやっていた。

この効果は学校でも発揮していた。授業で炎山の教えをしっかり聞いて、ノートに正しく分かりやすく書き込んでいた。
それを見た炎山は感心した。
「優也がちゃんと付いてきている。何か変わったことがあったのか？」
驚きつつ、付いてきていることは良いことと考えて、あえて何も言わなかった。
「あいつ、変わったな」
「理解できなかった奴が、急に理解できる奴に変わった」
「何があったの？」
他のクラスメート達も優也の変わりように驚いていた。
当の本人は自分に注目する周りに気にせずノートの書き取りをする。

家に帰り自室に戻った後、優也はすぐにパソコンを起動させた。
パソコンの画面にゲルくんがすぐさま現れた。
《お帰り、優也くん》
「ただいま、ゲルくん」
優也はゲルくんと、すっかり仲良くなっていた。
《授業はどうだったかな？》
「うん、理解できたよ」
《それは良かった》
「またやろう」
《もちろんだよ》
優也は今日もゲルくんと一緒にお勉強をするのだった。

一方、ドルフィンの開発室でレーザーヴェーブはあるものを完成させた。それは白いローラーボートだった。可愛らしいリボンを付けようとした時、
「……遅い！」
とベクターフェニックスの怒鳴り声が聞こえた。

ベクターフェニックスは特訓する部屋で優也を待っていたが、肝心の優也は来なかった。いつまでも来ないベクターフェニックスは怒っていた。
その様子をドラゴンコンボイとギアボルトが見ていた。
「イラついているな、ベクターフェニックス」
「それにしても、優也は、何で最近来ないのかな？」　実は優也はゲルくんと一緒に勉強して以来、サイバトロンのところへは行っていないのだ。
「優也には家庭という事情がある。それで来れないのだろ」

「家庭の事情？」
「我々トランスフォーマーと人間の事情はあまりに違いある。本来なら優也はその事情に委ねられるべきだよ」
家庭の事情の意味を知らないが、ドラゴンコンボイの説明でギアボルトは納得する。
「さて、なだめるか」
ドラゴンコンボイはベクターフェニックスをなだめようと近づく。
「そうカリカリするな、ベクターフェニックス」
「ドラゴンコンボイ」
「優也にも事情があるんだ。来たくても来れないのさ」
「特訓より優先する事情とはどんな事情だ」
「家庭という事情だ」
「……家庭の事情と宇宙の平和、どっちが大事なのだ」
「いや、秤にかけるのは無理があるだろ」
確かに、家庭の事情と宇宙の平和とでは比べられない。
「……あんまり怒ると、せっかくの可愛い顔が台無しだぞ」
「なっ！？」
ドラゴンコンボイの言葉にベクターフェニックスはときめいてしまう。ベクターフェニックスは恐る恐る訊ねる。
「じょ、冗談だろ？」
「いいや、本当のことだよ」
これを聞いたベクターフェニックスは顔を紅く染めた。
「……わかった、今日のところは解散しよう」
ベクターフェニックスは出て行く。
「あれ、あっさり引き返したな」
ドラゴンコンボイは首をかしげた。本当に乙女心を解らないドラゴンコンボイだった。

深夜になる頃には優也はぐっすりと眠っていた。　すると、パソコンがひとりでに起動する。現れたゲルくんが画面越しに優也を見つめる。
《眠っているな》
そう言い残し、パソコンの画面から消える。

バーストメガトロンがいる地下室のパソコン画面にゲルくんが現れる。
「来たか、ゲルシャーク」
ゲルシャークと呼ばれたゲルくんの姿は海豚から、機械仕掛けの蒼い鮫へと変貌した。
《トランスフォーム！》
蒼い鮫はトランスフォームした。凶暴そうな顔付きで、尾びれが腕となったロボットモードだった。
「報告を聞こう」
《はっ、優也はすっかり私を信頼しております。もうそろそろかと》
「そうか」
報告を聞いたバーストメガトロンは笑う。
「それで、優也の勉強の方は？」
《もちろん上達しています。上達させなければ信用されませんから》
「……今まで優也が勉強が駄目だったのは何故だ？」
《おそらく彼の中で理解できていなかったのでしょう。教えてきた者たちは彼に合う様に教えていなかったのでしょうね。解りやすく基礎というものを教えました》
「そうだったか」
バーストメガトロンは一安心する。
《しかし、バーストメガトロン様。何故、利用する者の心配をなさるのですか？》

「お前に知る必要は無い」
《す、すみません！》
質問したゲルシャークはバーストメガトロンの睨みに恐れる。

翌日、優也の携帯電話の着信音がなる。
「もしもし」
〈こらぁぁぁぁぁぁぁぁ、優也！！〉
「うわっ！？」
電話越しから、ベクターフェニックスの怒鳴り声が発せられ、驚いた優也はひっくり返る。ゲルくん（ゲルシャーク）も驚く。
「べ、ベクターフェニックス！？」
〈エレメントジュエリーが発見した、すぐに来てくれ。それと、今まで来なかった理由も聞かせてもらう。いいな〉
「は、はい！」
携帯は切れて、優也は落ち着く。
「やばいな……」
怒ったベクターフェニックスに優也は困ってしまう。
《優也くん、お友達？》
「うん」
《相当怒っていたみたいだね》
「……仕方が無いよ。行かなきゃ行けなかったのに、行かなかった僕が悪いんだ」
優也は今まで行かなかったことを反省する。
《……僕にも責任があるから、僕も連れていてくれる？》
これに優也は驚く。
「気持ちは嬉しいけど……内緒にしているから連れて行けないよ」
《大丈夫。誰にも喋らないから》
優也は考える。ゲルくんは人じゃないから連れて行っても構わな

いだろうと結論した。
「解った。でも、どうやって連れて行こう」
《君の携帯とパソコンを繋げて》
「えっ、携帯に繋げる？」
《君の携帯電話に移動する》
優也は携帯電話と自分のいるパソコンをコードで接続させた。
《行くぞ》
パソコンのゲルくんは消えると、携帯電話の画面にゲルくんが現れた。あっという間に移動したのだ。
「凄い」
《それじゃ、行こうか》
「うん」

優也はサイバトロンのところへ行く。ゲルシャークを連れて。

次回に続く。

蒼鮫〔ほんしょう〕（後書き）

短かったですが、いかがでしたか？
感想をお待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0130o/

トランスフォーマーエレメントフォース

2011年11月23日15時49分発行